

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

# 牛川

豊橋校区史

10

*Ushikawa*





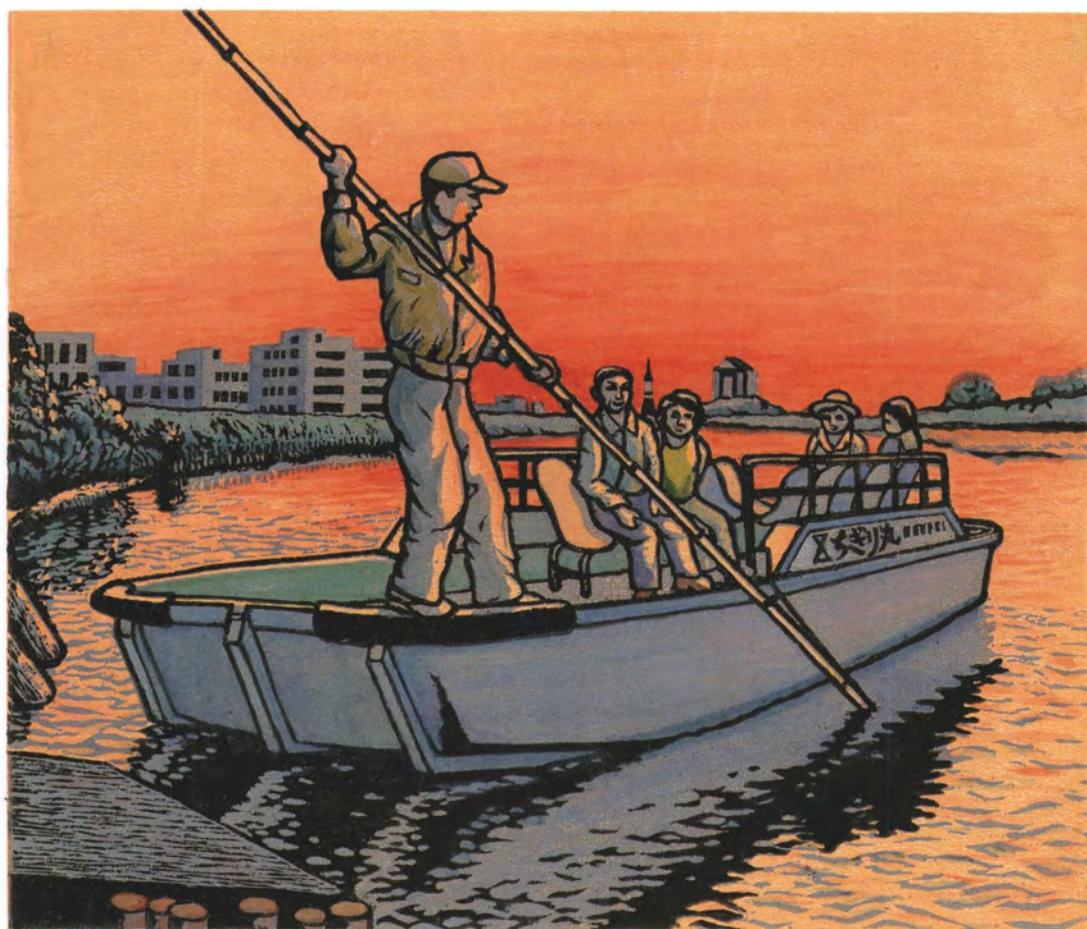




校区のあゆみ

# 牛川

*Ushikawa*



夕陽の渡船

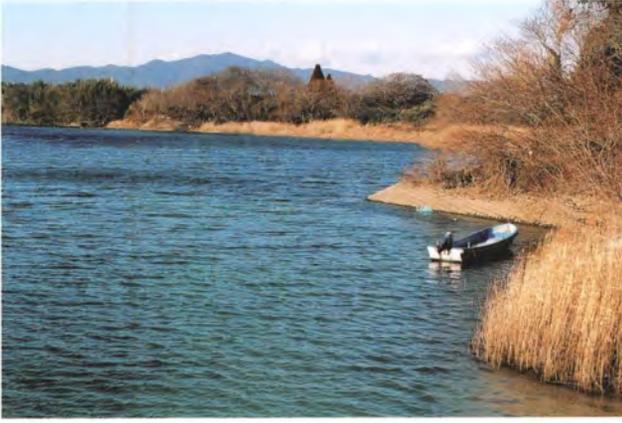
*N. Takahashi* 

夕陽の渡船 (手彩色木版画)

高橋規夫・作

## ■ 三つの川が育んだ牛川

豊川



朝倉川

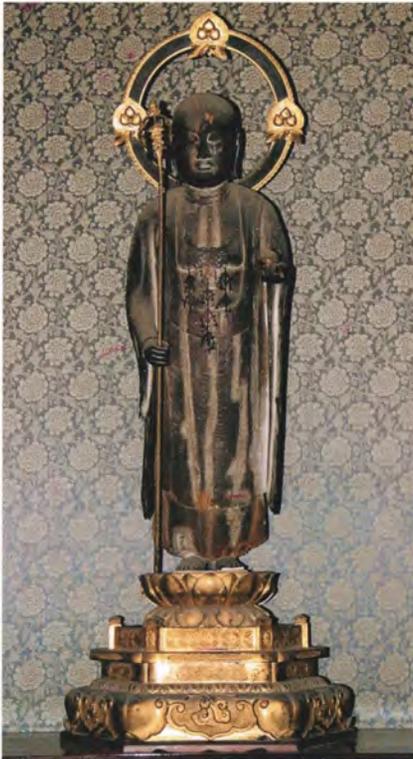
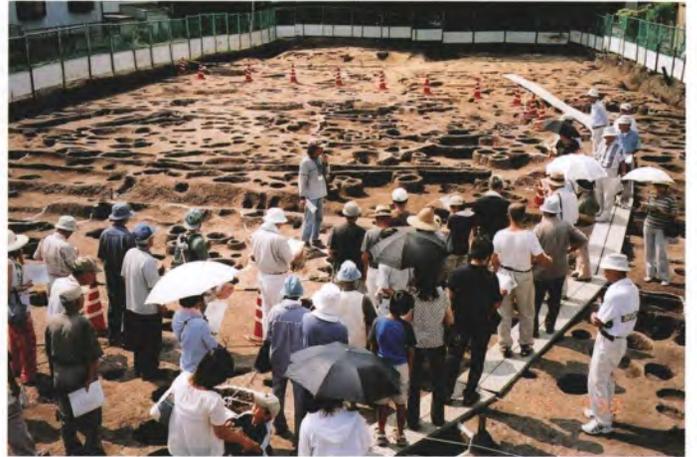


神田川



- 上段左 暮川地区の豊川  
右 沖野地区の豊川  
中段左 水に親しむ朝倉川  
(竹下卓志・写)  
右 お弓橋と朝倉川  
下段左 石巻山と神田川  
(堤防の上)  
右 増水時の神田川  
(平成15年)  
左 西側地区より見た  
石巻山の日の出  
(長井和夫・写)

## 遺跡と文化の町牛川



- 上段左 西側北遺跡出土遺物
- 右 洗島遺跡発掘説明会
- 中段左 豊橋市文化財 正圓寺の地藏菩薩  
(平安～鎌倉初期の作)
- 中 大河戸晩翠作「秋窓清供図」  
(明治15年・正太寺)
- 右 桃林寺と鎌倉古道  
(平成18年の区画整理で埋没)



上 牛川小学校 下 青陵中学校

上 桜丘高校 下 豊橋創造大学

上 牛川校区市民館 下 青陵地区市民館

# 人々の和が築く牛川



**無料**

## 牛川夢まつり!

牛川地区あそびの会主催 地域内外のみなさんお待ちしてます!

川がつなぐ音楽祭  
ヘリコプター遊覧&展示  
花火  
季節文化祭  
熊川園遊会  
季節エビ釣り  
費用へのチャンドル返し  
シートベルト着用  
交通安全教室  
交通安全教室  
交通安全教室  
交通安全教室

平成18年6月17日(土)  
10:00~21:00  
尾芝草場(18日、日)

- 上段左 力を合わせて (牛川保育園)
- 右 楽しい芋掘り (牛川小農園)
- 二段左 農作業の機械化 (暮川地区で)
- 右 青陵中の夏みかんの収穫 (古山保夫・画)
- 三段左 「牛川夢まつり」 (平成18年実施)
- 右 力作並ぶ展示会 (文協40周年) (竹下卓志・写)
- 下段左 ボクらも参加 (牛川夏祭りで)
- 右 祭り屋台 (熊野神社で)



# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思えます。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思えます。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度  
牛川校区総代会長

白 井 信 夫

私たちの校区牛川は、はるか北方に本宮山を望み、近くは清流豊川を抱き、東に霊峰石巻山に連なる弓張山系を仰ぐ、まさに大自然に恵まれた風光明媚な地域であります。

牛川原人説に代表されるように校区の歴史は古く、幾多の遺跡が現在も発掘されています。先人たちの営みが連綿と続いている歴史を思うとき、感無量の思いに包まれます。

急テンポで進む現代生活のリズムに追われる毎日、ゆったりとした郷土の歴史を今一度振り返ってみるのも意義深いことではないでしょうか。

今牛川は、健康な町づくり事業のモデル地区として健康家族を目標に活動を推進しています。「子ども110番」制度をいち早く実現し、青色回転灯のパトロール隊も活動しています。未来の牛川に向けて区画整理事業も推進されており、牛川小学校の運動場も、やがてはその姿を変えていくことになるでしょう。

市制100周年記念にあたり、「牛川校区史」を各ご家庭にお届けいたします。この冊子を糸口に、「昔の牛川」「今の牛川」「これからの牛川」を、ご家庭で話し合っていただければ幸いです。

校区史の編纂に携われた執筆委員に感謝し発刊の挨拶といたします。

## 第1章 自然と環境

- 1 土地のようす ..... 7
  - (1) 靴形の校区 ..... 7
  - (2) 高低差のある地形 ..... 8
  - (3) 大きく変わった土地利用 ..... 9
- 2 自然のいとなみ ..... 10
  - (1) 寒さと日照りと洪水と ..... 10
  - (2) 川の情景 ..... 11
  - (3) 鳥や魚や森の木々 ..... 12
- 3 「うしかわ」のいわれと今 ..... 13
  - (1) 牛川の地名考 ..... 13
  - (2) わが町紹介－6町内－ ..... 14

## 第2章 歴史と生活

- 1 原始・古代の牛川 ..... 16
  - (1) 牛川の原始人 ..... 16
  - (2) 縄文・弥生文化の宝庫 ..... 17
  - (3) 古代文化のあけぼの ..... 19
- 2 中世から近世へ ..... 20
  - (1) 日当たりのよい台地 ..... 20
  - (2) 街道と豊川の水運 ..... 20
  - (3) 街道沿いの古刹 ..... 22
  - (4) 武将の城跡 ..... 22
  - (5) 寺社の建立と発展 ..... 22
- 3 近世の牛川 ..... 25
  - (1) 吉田藩の施策 ..... 25
  - (2) 新田開発と村人の暮らし ..... 26
  - (3) 村の風習 ..... 28
  - (4) 信仰や伝説 ..... 28
- 4 明治から昭和初期 ..... 30
  - (1) 八名郡時代の牛川 ..... 30
  - (2) 豊橋市への編入 ..... 31
- 5 戦争のころ ..... 33
  - (1) 欲しがりません勝つまでは ..... 33

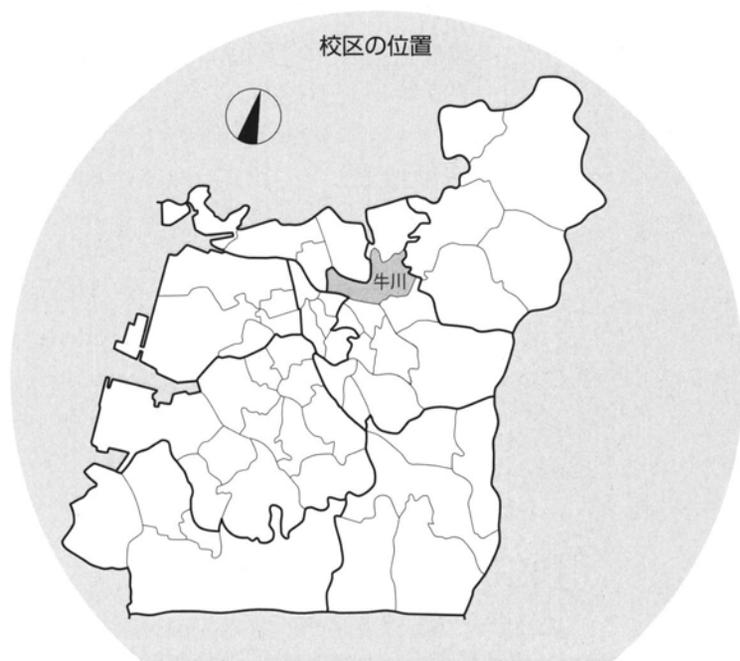
- (2) 大地震の恐怖 ..... 33
  - (3) 豊橋空襲のとき ..... 33
  - (4) 敗戦後の復興 ..... 35
- 6 牛川近代化のあゆみ ..... 36
    - (1) 移り変わる農業 ..... 36
    - (2) 産業の変遷 ..... 38
    - (3) 三菱レイヨンの誘致 ..... 39
    - (4) 人口増と鷹丘校区の分離 ..... 40
    - (5) 牛川校区の現況 ..... 41
      - ・年表－牛川校区のあゆみ－ ..... 43

## 第3章 教育と文化

- 1 充実した教育機関 ..... 44
  - (1) 幼児教育 ..... 44
  - (2) 義務教育 ..... 44
  - (3) 高等教育 ..... 46
- 2 生涯学習の町牛川 ..... 47
  - (1) 地域に根づく文化活動 ..... 47
  - (2) 体力と健康づくり ..... 48
- 3 明るく住みよい町牛川 ..... 49
  - (1) 犯罪や災害のない町に ..... 49
  - (2) 健康で明るい町に ..... 49
  - (3) 子どもたちにとっての牛川 ..... 50

編集後記 ..... 52

参考文献 ..... 52



# 第1章 自然と環境



校区の北部を流れる神田川

## 1 土地のようす

### (1) 靴形の校区

校区の位置 牛川校区は次の位置にある。

北緯	34° 46′ 00″ ~ 34° 47′ 20″
東経	137° 23′ 40″ ~ 137° 26′ 00″

豊橋市全域から見ると北方にあたり、豊橋駅から直線で約4kmの地点に牛川小学校がある。校区の東部には弓張山系が南北に走り、豊橋のシンボル石巻山が二等辺三角形の姿を見せている。空に突き上げたその形は実に美しい。

西には一級河川の豊川が大きく左右に蛇行して流れている。「母なる豊川」は、四季を通じ満々と清らかな水をたたえている。

豊川沿いの低地には神田川が、その北には下条地域から流れる大江川が、ともに豊川に注いでいる。台地の西部端下を縫うように牟呂用水が通じ、さらに校区の南には朝倉川が東西に流れている。

校区の広がり 牛川校区は6つの町内会（自治区域）に分かれている。6町内の広がりを見ると、豊川の流路によって沖野低地（若宮町）が西に突き出している。逆に中央部（洗島町）は豊川の蛇行に押し込まれた形で大きな曲線を描いている。

校区全体の形を見ると、どこか“天狗の鼻”か“靴形”に似ている。隣接地域との関

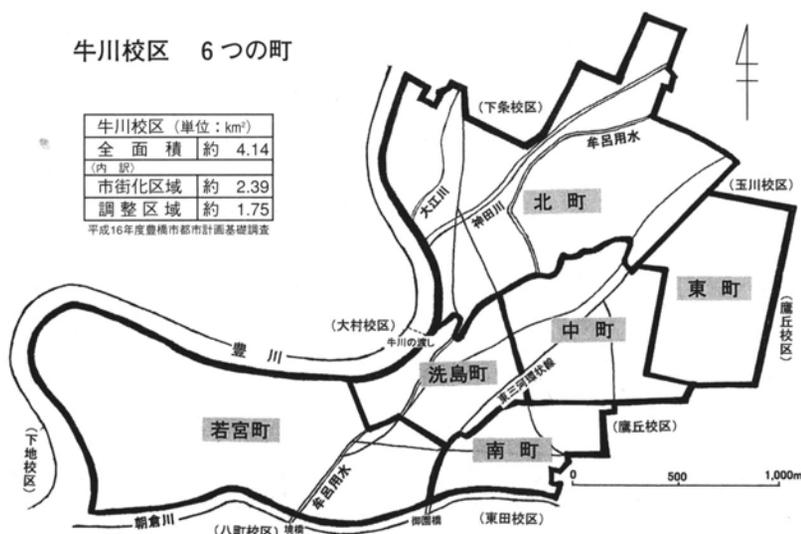
連で見ると、北町は下条校区と農地で、玉川校区とは道路で接している。

東町は三菱レイヨン豊橋事業所の工場と社宅で構成し、玉川・鷹丘校区と直線道路で区切られている。

南町・中町は、昭和53年（1978）に牛川校区から分離した鷹丘校区と接する。特に南町と鷹丘校区の境界はやや入り組んだ道路で分けられている。

南町・若宮町の南は、東西に流れる朝倉川を境に、対岸は東田・八町校区で、御園橋・境橋などの9つの橋で結ばれている。若宮町は八町校区に隣接し、官公庁・商業市街地にも近く、牛川校区の玄関口として交流と発展に深く関わってきた。

豊川の対岸（右岸）は大村、下地校区で“牛川の渡し”によって古くから人々の往来があった。洗島町・中町をはじめ、対岸に農地を持った人たちの利用も多かった。



## (2) 高低差のある地形

**台地と低地** 人々の主な生活の舞台は、弓張山系から続く台地面上に開けている。この台地は、山地に接して広がる低位段丘面で、更新世（約180万年前～1万年前）の後期に地盤の隆起によって形成され、小礫や細砂混じりの堆積物の地層である。

昔の台地は起伏が多く、各地にくぼ地や断崖面があり、松や雑木、竹林が茂る所が多かった。

校区には、この台地面とは対照的に豊川の沖積低地の地域がある。豊川が緩やかに蛇行して流れている左岸一帯で、完新世（1万年前～現在）の時代にできた土地である。豊川低地とも呼ばれている。

台地と低地では、地形も地質も異なる。東部の台地面は低位段丘面で、固結度の低い砂礫層であるのに対して、西部の低地面一帯は豊川の堆積土による砂質泥層である。低地に



牛川北町西側地区の土地高低図

は自然堤防（微高地）と呼ばれる堆積層の高い部分が見られ居住地になっている。牛川校区は、この台地と低地の二つの地形から成っていることが特長である。

**土地の高低差** 標高は弓張山系に近い三菱レイヨン豊橋事業所が約23m、牛川小が約15m、青陵中グランド南東の交差点が約9mである。台地面は南西に向かってやや低下し、台地の西端は豊川に、南端は朝倉川面に沿い、そこから坂道や断崖になって低地に下りている。沖野が最も低く約2.5mである。

牛川小学校北部の西側地区で見ると、急斜面を下りた暮川低地との高低差は約8～10mある（左図参照）。

現在、台地の末端で茂る斜面林や竹林は、牛川西部土地区画整理事業の土地造成によって大きく変化しようとしている。

坂道の多い地形は、往時の人たちの日常生活に影響を与えてきた。沖野の低地を通過して牛川の台地に上がる坂道は松の巨木が並び、「テボ松坂」と呼ばれる大変な急坂であり、登るのに難儀であった。しかし明治21年（1888）に牟呂用水が開通し、現在の堤防上の道路が主要道となって通行は便利になった。

次の難所は青陵中正門前の坂で、後藤庄五郎家が坂の上にあったため通称「後藤坂」と呼ばれた。往古は谷が深く入り込んでおり、歩行者があえぐ坂おとしの急坂であった。戦時下、歩兵第十八聯隊（豊橋公園）から下肥を運ぶ者にとっても恐れられていた難所であった。

大正3年（1914）後藤坂は改修され道も広げられて緩やかになった。後藤家の入口には「坂道改修」の記念碑がある。



坂道改修記念碑

### (3) 大きく変わった土地利用

土地利用の変化 土地の利用は時代とともに大きく変わった。



昭和初期の牛川



昭和50年代初期の牛川

A図は昭和の初め頃で、家並みは旧街道(別所街道)沿いに、集落は中町・北町に多く見られる。東部方面の台地一帯は、ほとんど家はなかった。農耕地としての利用度も低く、昭和初期までは主に桑畑で、後に梨や柿の果樹栽培地となった。江戸時代は藩主の鷹狩りの場でもあり、戦時中は軍隊の演習地に利用されるなど、荒地や沼地も多かった。



C図 平成10年の牛川

B図の昭和50年代になると、住宅地域の広がりが目立ってきた。それは、昭和36年～52年にかけての朝倉川以北の広範囲(約286ha)な牛川土地区画整理事業の成果である。土地利用の様子が大きく変化し、従来の住みにくかった土地が整備、改良され、住宅地域化が急速に進んでいった。

三菱レイヨンが創業を始めた昭和37年、45.6haの土地は工場と社宅に転用され、東町が誕生した。新しい広い道路の建設も進んでいった。校区の中央を県道東三河環状線が石巻方面に通じ、若宮町から南町の道路が拡幅されて、1キロ公園を南北に横切る都市計画道路も整った。市街地や隣接地域を結ぶ主要道路が整備され人々の行動範囲も広がった。

C図は平成10年の校区地区図である。台地上は一段と住宅が密集してきた。

牛川の土地区画整理事業は古く、昭和9年度(1934)牛川薬師の地域を中心に始まった。現在は、牛川西部土地区画整理事業が行われ、今までの景観が一変して新たな土地利用に向けて動いている。(P43参照)

## 2 自然のいとなみ

### (1) 寒さと日照りと洪水と

**冬の寒さ** 牛川の冬は寒い。風が冷たく強い。三河湾に注ぐ豊川は漏斗を縦に切った形になっており、沖野はその口に当たる。冬の三河湾を吹き抜けた冷たい北西風は、豊川に集まり勢いを増して沖野から牛川台地に吹き上がる。そのため体感温度が下がるからである。特に飽海（八町校区）から沖野を通して坂上（若宮町）までの道筋は、寒風肌を刺す北西風が強く、「吉田の三寒」の一つとして名を馳せていた。

**夏の日照り** 日照りによる水不足には常に悩まされてきた。特に昭和3年（1928）は梅雨に入る前から全く雨が降らず、田植えもできなかった。生活にも大きな支障が生じ、村人は相談して、雨乞いをすることに決した。

6月30日の早朝、黒御幣を受けるため、三重県の多度神社に2人が出発した。一方、熊野神社に供える水を地獄沢で汲み、小ぶなを5匹捕らえて桶に入れ、祈願の準備をして待った。黒御幣を5円で受けた2人は、休むとそこに雨が降るといので、汽車の中でも御幣を交代で差し上げてきた。豊橋駅で待機していた出迎えの若者が駆け足で熊野神社に向かい、供えて3回の祈禱を行った。

翌7月1日、朝は晴れていたが、午後になって久しぶりに雲が出、3時になって、にわか大雨が降り出した。田畑もよみがえり大いに祈願成就を喜んだ。

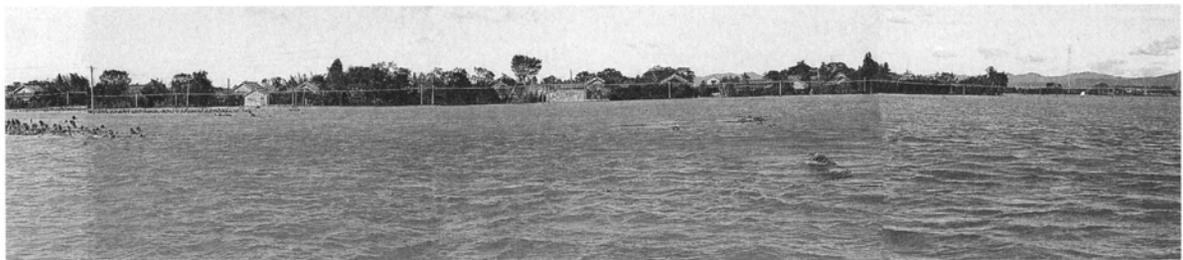
**朝倉川の洪水** 朝倉川は多米から豊川に注ぐ川で、往古は川幅が広く水量も豊かで、飽海橋の下手には船溜りの地名もあった。明治のころは田下駄や田舟を使っていた。しかし、堤防がなく大雨ごとに溢れた。特に昭和13年と41年の洪水被害は甚大であった。

昭和41年10月12日、集中豪雨により朝倉川が氾濫し、ダーダー橋付近の住民が孤立状態となった。豊橋警察署の警察官5人が舟艇で救出に向かった。3人を救出し舟艇の向きを変えようとした瞬間、濁流に押し流された。舟艇は150m下流のダーダー橋の橋脚に激突して転覆。1人は助かったものの、7人の尊い命は濁流に飲まれてしまった。

**暮川の水害** 暮川地区は沖野とともに洪水が頻繁に起こり、水禍との戦いであった。豊川流域で大雨が降ると、はき切れない濁流が、霞堤の切れ目から差し水となり、沖野や下条田面に滞水した。特に満潮時と重なると、その量は大幅に増えた。住居のある微高地を残し、田も道路も全て冠水し、大海原と化した。退水時には置き泥が農作物の上に堆積し大被害を被るのであった。

浸水の心配があるときは、早退してくる子どもたちを忠魂碑前まで迎えに行った。畳をあげ、米麦を「水上台」に上げたり、家畜を屋敷内の高いところに移したり、農機具が流れないようにした。

日ごろから、盛り土の上に家を建築し、籾米の備蓄・農作業の手順・舟の管理や避難の備えなど様々な工夫をして、災害に備えていた。



伊勢湾台風による暮川・下条の洪水（昭和34年9月26日朝）

## (2) 川の情景

**悠々たる流れの豊川** 豊川は水量が豊かで、水質が良く、わが国を代表する河川である。牛川で見る豊川は、川幅いっぱいに清流をたたえ、大きくゆったりと蛇行して流れている。四季折々に変化する豊川と周りの景観は、往古から人々の心を潤し、生活とも深く結びついてきた。時に自然が猛威を振り大きな被害を受け、人々は川との戦いも起こしてきた。

豊川は清流を生かして、16世紀に舟運が始まった。信州方面から糸・まゆ・タバコ・紙などが舟下りし、信州には、茶・塩・魚・綿などを運んだ。木材を組んだ「いかだ」も豊川を下った。悠々たる流れ、豊川の雄大でたくましい姿である。

**牛川の渡し** “牛川の渡し”は、豊川の風情を代表している。下川村の村営であった明治から大正のころは、一回の渡船が2銭から5銭であったが、昭和7年、豊橋に合併と同時に市に移管され、渡し賃は無料となった。

現在、一艘の渡し舟が道路の役割で対岸の大村側と往復している。自転車通学生や仕事で通う人、買物・レジャー・観光の人たちの大切な足になっている。

船頭が、対岸と結んだワイヤーロープに船を滑らせ、竹竿1本で操る手漕ぎ船である。船は常時牛川側に留めてあり、大村側からの乗船者は、吊るされた金パイプの鐘を打って迎えの渡船を待つ。かつては豊川に10数か所の船着河岸があったが、今は牛川だけ。一日

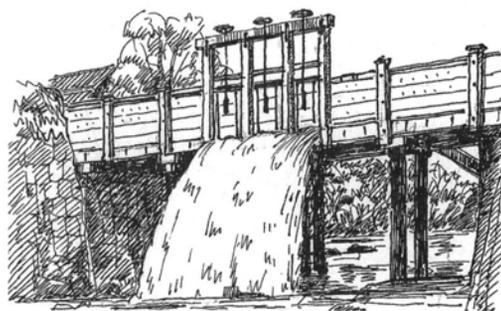


今なお健在「牛川の渡し」

平均16往復する牛川の渡しは、今も昔ながらの情緒を残している。

渡しから上流を見ると、河畔林が水際まで覆い、昔と同じ景観を残している。一方、下流は護岸工事が整い、創造大学と市街地の高いビルが見える。この二つの顔が今の豊川の風景である。

**川淵の堤防上は**、春から秋にかけて豊川の涼風を肌を受けて散歩する人が多い。**牟呂用水とダーダー橋** 朝倉川の真上を交差して流れている牟呂用水。昭和頃までは木製の井堰で扉を開閉し、水量を調節して流していた。用水から朝倉川に水が音を立てて落ちるさまから、通称「ダーダー橋」と呼ばれ、豊橋名物の橋として親しまれていた。



ありし日のダーダー橋

**神田川** 石巻山のふもとに源を発する神田川は、石灰岩の間を流れて来るのでカルシウム分を含んだ水だといわれる。

その関係か、カワニナが多く、昔からゲンジボタルが乱舞する川として知られてきた。しかし上流では見られるホタルも、牛川校区では環境の変化により観察ができなくなってしまった。

**朝倉川のサクラと菜の花園** 朝倉川河畔はサクラの咲く頃から賑やかになる。南町一帯は河床が広く、護岸も緩やかで足場がよく、川岸まで下りられる。

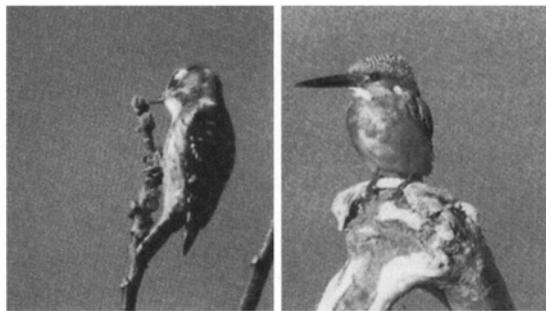
4月、堤防や河床一面にセイヨウカラシナ(菜の花)が黄色の花を咲かせる。サクラとともに季節を知らせる朝倉川の花になった。

### (3) 鳥や魚や森の木々

**野鳥の生息地** 豊川の一帯は野鳥が多く生息している。一番多く見られるのは留鳥のカワウで、暮川の集落辺りの河畔林に集団でねぐらをとっている。秋から冬にかけては、ムクドリが集団でねぐらを作る。冬にはカルガモを始め、キンクロハジロ・ホシハジロ・マガモ・オナガガモ・ヒドリガモなどが羽を休める。時にはヨシガモもいる。

沖野の農耕地や浪ノ上の屋敷林、雑木林や竹藪には、季節を通じて多くの野鳥が生息し、メジロ・ウグイス・ホオジロ・ハシボソガラス・ヒヨドリ・イカル・キジバト・セッカ・モズ・コゲラなどが餌を探している。冬には北国からカシラダカ・ジョウビタキ・アオジ・クイナ・シロハラ・ツグミ・オオジュリン・ベニマシコ・ウソ・シメなどがやってくる。時には猛禽類のオオタカやノスリ・ミサゴなども姿を現す。

朝倉川には、よく、カワセミ・イソシギの姿を見ることができる。またセキレイ・サギの仲間にも出会える。



コゲラ (左) とカワセミ

**川の魚たち** 豊川の清流には魚の種類が多い。河口から約6kmにあたる牛川流域は汽水域と呼ばれ、上流からの淡水と満ち潮による海水の差し込みのため、川と海の魚が生息している。アユ・カワムツ・モツゴ・オイカワ・コイ・ウグイ・フナ・エビなどの淡水魚とマハゼ・ボラ・セイゴ・キビレなど海水魚と一緒に棲んでいる。

牛川の渡し付近で、干満の差は2m。6～7月にはマダカの姿も見かける。

朝倉川は多米の滝ノ谷池を源にして豊川に流れている。豊川と同じように、夏にはアユが上り、オイカワ・カワムツなどの魚影が見られる。淡水性のハゼの仲間、ヨシノボリも棲息している。

**緑なす樹木** 牛川の台地上は、多くが宅地化され、自然林など昔を留める樹木は少ない。自然を残す台地の末端部には、広葉樹のエノキ・ムクノキ・シイノキ・クスノキや竹林などの斜面林が残っている。北町から若宮にかけてその景観が見られる。

寺院や神社にはシイノキ群落が残っている。暮川の素盞雄神社の鳥居横に、「とよはしの巨木・名木100選」に指定されたスギの大木が威風堂々と静かな境内にそびえている。

豊川の流れを包むように、暮川集落から牛川の渡し一帯に、河畔林が広がっている。ムクノキ、エノキ群落で、その中にタブノキ・モチノキ・シロダモ・シイノキが混じっている。水際にはメダケが茂り、その内側にはメダケが生い茂っている。今も自然を色濃く残している場所である。家屋は新築しても、昔ながらの屋敷森がそのまま見られるのも暮川の風情である。

**街路樹** 牛川の街路樹も生長し、四季折々に変化を与えてくれる。東三河環状線のプラタナス・イチョウ、若宮～南町幹線道のトウカエデ・ナンキンハゼ、その他、コブシ・ハナミズキ・アメリカフウなどの並木が見られる。

牛川遊歩公園（1キロ公園）はクスノキが公園全体を覆い、サクラも多い。平成17年、健康遊歩道ができ、ウォーキングを兼ねた人たちで樹木の下はいつも賑わっている。

青陵中学から東田坂上を結ぶ青陵街道夏みかん並木もわが町牛川の名物となっている。

### 3 「うしかわ」のいわれと今

#### (1) 牛川の地名考

**地名発祥の地** 牛川の台地は浪ノ上（北町）から南に続いており、南端部はねこぶち沢に沿って緩やかな斜面になっている。崖下には神田川の沖積低地が開け、暮川に続く肥沃な水田地帯へと広がっている。牛川の地名の発祥地は、このねこぶち沢に沿い、豊川の船着場を臨む西側台地と考えられる。

そこは日当たりがよく、<sup>ぼとう</sup>日南と呼ばれていた。日南の部落は、<sup>なぎえ</sup>楮江村（浪ノ上村）と地続きで、その枝村として発足したらしい。

日南の村の鎮守として祀られていたのが偏戸社と呼ばれる古社である。御車の牛を休めた所を偏戸の社というように、石巻神社との因縁も深く、石巻大明神の守護所であったと考えられる。

偏戸社は明治5年（1872）の一村一社の令によって無格社となり、やがて中郷熊野神社に合祀されるが、深い関わりをもっていたのは牛河山桃林寺である。山号と地名とどちらが先かは定かでないが、牛川村の発祥の頃に桃林寺ができ、桃林寺とともに牛川が発展したことは間違いなからう。



土地造成の進む「ぼとう」台地

**うしかわの「牛」** 牛は古来から「田の神」としてあがめられていた。その牛が、自然の恵みと同時に恐怖の対象ともなる豊川と結びつき、この地を牛川と呼ぶようになったと思

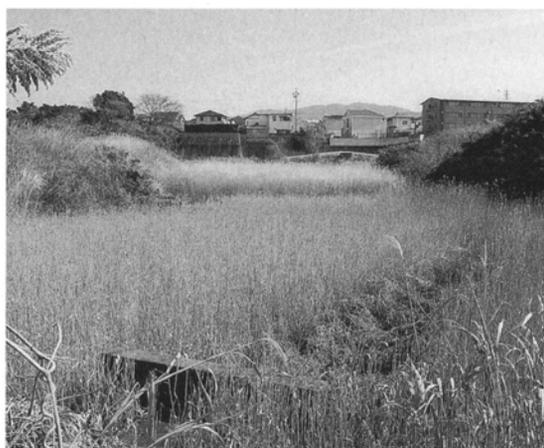
われるが、定かではない。

牛にまつわる伝説として、<sup>すきのおのみこと</sup>素盞雄命が牛に乗って流れを下ってきたとか、洪水のとき黒牛が熊野神社の祠を角にかけて泳いできたなどの伝説が校区には残っている。

<sup>ぼとう</sup>日南の台地の縁（フチ）にあることからフチ⇒ウチ（内）⇒ウシ（牛）になったという説がある。豊川の潮（ウシオ）のオが脱落したのではないかという説もある。郷土史家石川一美は、「潮さず河岸に由来して縁川・潮川⇒牛川はどうだろうか」という考えを投げかけている。

**おもしろい地名** 地名は生活上必要によって生まれ、幾代も受け継がれ親しまれてきた貴重な文化遺産であり、生きている文献である。しかし、時代と共にその役目を終え消滅する運命も背負っている。

「おもどろ」とは<sup>おもて</sup>面が<sup>どろ</sup>泥の状態からきたのであろうか。浪ノ上公園から台地を降りた低地を指す。特に排水の悪い牟呂用水と神田川に挟まれた泥湿地の所をオモドロとか<sup>なまど</sup>生土と呼ぶ。<sup>まました</sup>埴下のママはガマともいい、魚が棲む川岸の穴をいう。ギロウとは<sup>おけ</sup>桶のように田の中を通す溝のこと。ライホテのライは大きい意。ホテとは湿地や低地、草生地を指す。いずれにしてもそのいわれをたどり、推察してみるの楽しいことである。（P41参照）



おもどろの湿地

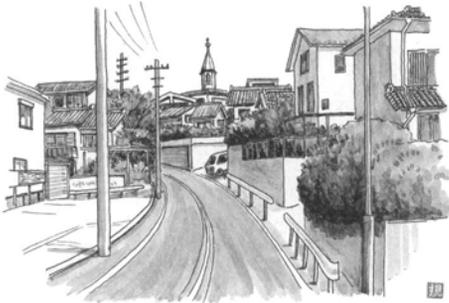
## (2) わが町紹介— 6 町内—

**南町** 昭和初期、先住者が住み始めた頃の南町は、ほとんどが雑木林と原野で、戦前は数戸の家しかなかった。大戦中はその大半が陸軍用地で実弾射撃場に使われていた。

昭和23年（1948）の市営田中住宅の建設が南町発展の母体となった。田中の地名は、ライホテ川下流地域の松坂家が開発した田中新田に由来する。田中神明社は宝永5年（1708）に創立され、松坂家が祭司を務めた。

神明社東側に、昭和34年（1959）私立桜ヶ丘高校が東田東郷町から移築され、現在は中学校も併設して生徒たちで賑わう学園地帯になっている。

南町は家並みが新しく、南低地に朝倉川が流れ日当たりの良い台地上が生活の舞台である。道路は整備され、生活必需品の調達にも便利で大変住みよい町である。



南斜面の住宅地（南町）

**北町** 昭和7年（1932）八名郡下川村が廃止となって豊橋市に合併したとき、浪ノ上集落と北郷集落、旧下条村の暮川集落が一緒になって現在の北町ができた。

浪ノ上は古くから人が住みつき、遺跡が多い。畑のどこを掘っても遺跡や石器が出るといわれる。もともと林地、竹林、雑地など起伏が激しかったが、牛川浪ノ上東部土地区画整理事業で宅地化され、新しい家が建ち並んで組数が増え、地域が大きく変化を見せた。

暮川地区は29戸、昔から温かい隣人愛にみちた集落としてその絆が強い地域である。

北郷地区も遺跡が多い。平成7年認可の牛川西部土地区画整理事業が進んでおり、宅地の造成と道路建設が行われている。今、大きな変化が見られる地域である。



旧下川村役場跡の忠魂碑（北町）

**洗島町** 大正15年（1926）に創立した旧制愛知県豊橋第二中学校が、昭和6年（1931）、地元の人たちの尽力で現在の青陵中学校の用地に校舎を新設し、授業を始めた。今の校舎以前の建物である。

農業主体の静かな地域に、当時としてはモダンな本館と斬新な学び舎が人々の目をひいた。市内各地や近郊の郡市から多くの学生たちが集まり、若々しい声が響き、新たな気風を感じる地域になった。

洗島には、別所街道沿いに牛川の渡しを見下ろすように馬頭観音石仏が建っている。背面の文字は風化して判読できない。馬は道路交通の主役で、その供養と往来する人々の道祖神の役割をもっていた。

洗島は通行の要地であり、街道と渡しを知らせる「道しるべ」として、当時の面影を偲ばせている。



馬頭観音石像（洗島町）

**中町** 旧道（別所街道）は昔から生活用品を売る店が並び、近郊近在の人たちの必需品をまかなう所として賑わってきた。街道と東西に走る道路が交わる交差点は人々の往来が盛んで、交通拠点の機能を果たしてきた。

中郷の熊野神社は中世牛川村からの鎮守である。昭和19年（1944）の三河地震で倒壊したが、戦後、物資不足の中、地元の人たちの尽力で同22年（1947）に再建された。

子ども会の活動で、昭和49年（1974）牛川交番前の公園にチビッコ桜を植えた。今見事な花を咲かせ、人々の目を楽しませている。

中町は小学校、保育園、校区市民館、郵便局、消防分団詰所、農協、信用金庫など、暮らしに直結する施設が多い。校区の人々が大勢集る場所として大切な役割をもっている。

現在牛川西部土地区画整理事業の真っ最中で、大きく変貌している地区である。



交差点から石巻山を望む（中町）

**若宮町** 若宮町も古い歴史をもつ。天和2年（1682）飽海町から移住した村越氏と朝倉氏が開発した町である。

沖野から坂上橋まで上る急な坂道には、戦前まで巨大な老松が立ち並び、「手棒」と呼ばれていた。松の枝を逆に挿して行く末を占ったという「逆さ松」の伝説が残っている。

戦時下、坂上橋から南町にあった演習地（射撃場）に通じる道を「兵隊道」と呼んでいた。第十八聯隊の兵士が毎日行進した道である。

豊川と朝倉川との一帯を沖野といい、古くは船着場であった。沖野低地は開拓と耕地整理で農耕地として整備され利用が高まった。

沖野に昭和58年（1983）、豊橋短期大学（現豊橋創造大学）のキャンパスが開けた。耕地も広く、市街地にも近いため、今後さらに大きく発展が期待される地域である。



沖野低地に広がる耕地（若宮町）

**東町** 三菱レイヨンの従業員家族だけで構成している町で、現在、南と西社宅に170世帯、約650人が住み、独身寮が2つある。60歳以上の人がいない町である。

江戸時代、吉田藩士たちが隊列を組んで、笛と太鼓を先頭に調練に来た。二ツ橋辺りに、二間四方、高さ一間程の台場を設け、木製の砲で屏風岩（鷹丘側の山）を目標に発砲練習をした。城主自らも検分に来たという。後に、二つ橋、半の木辺りを「兵たん野」と呼び、歩兵聯隊の射撃場にもなった。

東町では「わくわく農園田植え大会」「地引網体験ツアー」など各種行事を取り入れ、親子や社員のふれ合いと親睦を大切にしている。社内に神社を祀り祭礼にはおみこしを出し模擬店も並び大変賑やかである。会社では常に近隣町内の人たちとの親交を大切にして「開かれた三菱レイヨン」に努めている。



サツマイモの収穫（東町）

## 第2章 歴史と生活



鎌倉古道といわれる小路（北町）

### 1 原始・古代の牛川

#### (1) 牛川の原始人

**世紀の大発見** 牛川に人類が住んでいた証拠となる骨が発見された。わずか10cm足らずの骨であったが、世界でも珍しい「原人の骨」と鑑定されて町中を歓喜させたことがあった。

それは昭和32年7月の暑い日。牛川町乗小路（現鷹丘校区）の、通称石灰山と呼ばれる牛川鉦山で、セメントの原料となる石灰岩が採掘されていた。従業員田中伝が地上に落ちていた無数の骨を拾い集め、牛川小学校の石川一美教諭のもとへ持参したことに始まる。石川はめばしい数点を取り出して、伊川津貝塚の発掘調査をしていた鈴木尚東大教授に見



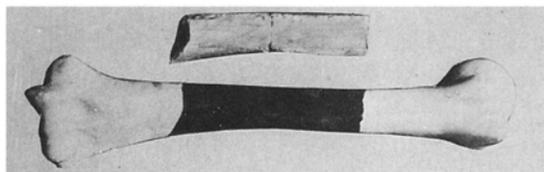
牛川人骨の発掘現場

せた。鈴木教授は骨を見るや、すぐさま牛川鉦山にとんで来た。

発掘現場は30mもある石灰岩の絶壁。地上から20mの地点に高さ5m幅3mの洞穴があり、白一色の岩の間に、鮮やかな赤土の層があった。鈴木教授は数回の

発掘調査を繰り返した。出たものは動物の骨ばかりであった（翌年、近くから牛川第2人骨発見）が、一緒に調査した地質学者によって、中期更新世の後半（更新世は約180万年前～1万年前）にあたる地層であることが判明した。

**ロマンあふれる骨** 鈴木教授の研究の結果、この人骨は身長132cmほどの女性であり、約10万年前のものであって「原人というべきものの上腕骨」という鑑定が下された。マスコミはこの成果を大きく報じ、中学校社会科の教科書にも「牛川原人」という名で掲載された。



出土した牛川人骨（上）と復元した上腕骨

現在、“原人”という鑑定結果には異論も唱えられているし、この人骨がそのまま現在の我々の祖先に直結しているわけではない。しかし、古代のロマンは果てしなく、我々を夢の境地にいざなってくれる。

**石器時代のヤジリ** 今から数万年前、世界的に寒かった時代が終わって温かな時代に入った頃、牛川東部の野山には、狩猟や採集に明け暮れていた人々がいた。その人たちの使っていた石器が発見されている。石槍の穂先に付けた有舌尖頭器とか、原石から剥片を打ち取った石核などが数か所から発見されている。こうしたことから、牛川の東部地域には、かなり古くから人類が住みついていたことがわかる。

## (2) 縄文・弥生文化の宝庫

**豊橋最古の縄文の村** 石器時代が終わると、縄文土器に代表される縄文時代に入る。1万年前～紀元前3世紀に渡る長い時代である。洞穴や岩陰に住む生活から、<sup>たてあな</sup> 竪穴住居を作って住み着くようになったと言われている。

平成18年、<sup>めがね</sup> 眼鏡下池北遺跡から、8千年ほど前にあたる縄文早期の住居跡が発掘された。直径2mの楕円形をした竪穴住居であり、柱穴が壁沿い



現地説明会のようす (平成18年3月25日 眼鏡下池北遺跡)

にぐると巡っていた。住居の内外にはいくつもの炉穴が見つまっている。炉穴とは食物を調理するために火を焚いた穴であり、円形や三角形などの形をし、大きさも長さ60cmから2mまでさまざまである。煙を出す穴がトンネル状に掘ってあり、強い火で焼かれたらしく床や壁面が赤く変色して残っていた。当時ここで煮炊きをしたことが明らかになったのである。この例は豊川市国分寺北の遺跡からも発見されているが、70基を数える炉穴は県下最多である。

また集石炉も7基見つかった。これは直径1mほどの穴の中に直径5cmほどの小ぶりの焼けた石がぎっしり詰まった炉であり、蒸し焼き料理に使用されたと思われる。他に火災で焼けたと思われる弥生時代住居の<sup>こんせき</sup> 痕跡や、土器・石器など貴重な資料が多い。この発掘の成果は、竪穴住居・炉穴・集石炉という当時の生活を示す3点セットが、県内で初めて

確認されたことであり、豊橋でも最古の集落遺跡として注目されている。

**謎をよぶ出土品** 平成17年、約4,500年前にあたる縄文時代中期の集落が<sup>あらいしま</sup> 洗島遺跡で見つかった。竪穴住居跡が6軒出土した。大きさは円形のもの直径4m、長方形のもの6

m×3mであった。注目すべきことは、近畿地方や中部高地で見られる土器や太平洋沿岸でしか採取されないベンケイガイ(貝輪材料)、中部高地産の<sup>こくよう</sup> 黒曜石(石器の材料)の破片などが、地元で作られた

土器に混ざって数十点出土したことである。

かなり遠方から牛川にまで材料が運ばれ、集落の中で貝の腕輪や石器や玉が作られていたことが推測される。また<sup>といし</sup> 砥石が立った状態で埋められている土<sup>どごう</sup> 壇や中世の火葬墓もあった。

**遺跡発掘のはしり** 昭和25年(1950)2月、弥生時代の住居跡が発見された。牛川校区の遺跡発掘同好会「さざ波会」が発掘したもので、明大教授後藤守一や日本考古学協会員久永春男らの調査により弥生時代後期の竪穴式住居跡と認定され、浪ノ上第一遺跡と命名された。この頃から牛川の遺跡は住民の手により精力的に発掘され、考証されている。

昭和34年刊の「牛河」には、遺跡に関する資料提供者として14人の名を載せている。中心は牛川小学校の教諭石川一美であった。石川は牛川の歴史を解明する手がかりを作り、郷土史家として多大な業績を残した。

**ムラの成立** 紀元前3世紀、稲作の技術が大  
陸から九州にもたらされるや、瞬く間に米作  
りは本州最北端にまで伝わった。そこから紀  
元3～4世紀までを弥生時代とよぶ。人々は  
狩猟や採集といった不安定な食料獲得事情か  
ら解放され、計画的に安定した食料を得るこ  
とができるようになった。

人々が住み着いたのは水辺の近く。協力し  
合って田を開き、栽培・収穫・貯蔵などを行  
うようになり、血縁を中心にひとつの集落を  
作っていった。やがて集落も大きくなり、一  
族を率いる有力者が現れてムラを作り、ムラ  
の周りを防御用の濠で囲むようになった。

西側遺跡からは環濠と呼ばれる防御用濠が  
発掘されている。そこから北西に向かって、  
眼鏡下池北遺跡・浪ノ上遺跡、さらに狭間遺  
跡・城ノ内遺跡（現玉川校区）と遺跡は続く。  
まさに当時、力を得た者が仲間を率いて暮ら  
していた跡であるが、約3.5kmの台地上に連な  
るこれらの集落群は、どんなつながりをもっ  
ていたのだろうか。

**姿を消した人々** 弥生時代を特徴づける国産  
の青銅器として銅鐸がある。銅鐸は農耕祭礼  
に用いられた祭器と考えられている。近畿を  
中心に450基ほどが確認されており、この付  
近は三遠式銅鐸が見つかっている。

平成14年、弥生式土器とともに、銅鐸の一  
部分が西郷遺跡から発掘された。出土したの  
は銅鐸の飾耳であり、直径3.7cmほどの円形を  
なしている。しかし銅鐸の紐（吊り手の所）  
の部分に飾耳が付くのは近畿式銅鐸の特徴で  
ある。

一般的に言って銅鐸というのはどこでもほ  
ぼ完全な形で出土しており、このような破片  
のみの出土は数が少ない。また、三遠式銅鐸  
の分布地で近畿式銅鐸の破壊片が発掘された  
ことも不思議である。

さらに発掘品から推測すると、弥生時代の  
末期にこの地域での人々の生活は、一時期途  
絶えてしまっているのである。その理由は謎  
に包まれ、未だ解明されていない。



豊川のほとり、洗島で生活する古代の人々（想像図）

伊奈 彦定・画

### (3) 古代文化のあけぼの

**数多い古墳の宝庫** 4世紀になると、弥生時代末期にいったん途切れた人々の生活が再び復活した。台地に人々が生活してムラを形成し、力の強いムラの首長が他のムラを統合してより大きなムラを作った。それら豪族たちがその権威を示すために築いた墓地が古墳である。

牛川にも幾つかの古墳が残っている。牛川北部地区には、段丘の上に点々と古墳が築かれている。浪ノ上1号墳・稲荷山1号墳であり、方墳が多く見られる。

それらの遺構からは、柱穴や炉の跡、焼土の固まりや、火災を受けたと推測される住居跡も見られる。土師器もまとも出土しているし、鉄剣も出土した。発掘された竪穴住居跡は古墳時代や奈良・平安時代の遺構でも

あり、柱穴は分かりにくいものの、中央の炉の跡、壁面の焼土の固まり、壁際の土留めの板の跡が見られる。楕円形の穴からは土師器がまとも出土しており、碧玉製の管玉も出土している。

**葬送儀礼の痕跡** 西側北遺跡は豊川を望む河岸段丘の中位面のところにある。神田川と眼鏡川によって開かれた標高14mの場所である。

平成17年、区画整理事業にともなって発掘調査が行われ、多くの成果を得た。縄文時代のもものでは3軒の竪穴住居が発掘され、中から縄文土器や磨製石斧・剥片石器・骨が出土した。弥生時代のもものでは土器棺墓が出土した。壺と甕を組み合わせたものであり、壺の口を意図的に割って、欠けた部分に甕をかぶせ、土壌に斜めに傾けて埋めてあった。

古墳時代のもものとして、陸橋部付の方墳が

1基発掘されたが、そこから当時の葬送儀礼を思わせる跡が見つかった。古墳中央部にある墓塚からまとまった量の炭や鉄製の副葬品が発掘されたが、墓を囲むように柱穴が8基確認されたのである。柱の間隔から判断するとおよそ2間四方の建物である。現在のところ推測の域を出ないが、おそらく、死者を埋葬まで安置しておく小屋、つまり「喪屋」ではないかと思われる。

喪屋は全国的に見ても神戸市の住吉東古墳で見つかるに過ぎない。加えて、墓を造る前に土器を粉々にして撒いたり、火を焚いてお祀りした跡も見られ、葬送儀礼を考える上で貴重な資料となっている。



牛川の遺跡や古墳

## 2 中世から近世へ

### (1) 日当たりのよい台地

稲作りの場所 平安時代中期、源順が編纂した「倭名類聚抄」には、八名郡に多米・美和・八名・養父・和太・服部・美夫の七郷のあったことが記述されている。牛川の名はないが、多米郷と美和郷(石巻の神郷に当たる)の一部が牛川にかかると思われる。また、沖野地区の小字名に「一の坪、宝塚、ギロウ」があったことや、暮川や下条・賀茂地区に条里制遺構のあることから考えると、牛川にも条里制が施行されていたことは推察できる。

稲作りの場所としては、ヲイホテ川の流域、浪ノ上の泥湿地帯、稲荷沢、中沢、地獄沢、半の木沢、猫淵沢などが選ばれたと思われる。これらの地域は水利もよく、開田のための大掛かりな工事も必要なかった。



今も続く暮川の水田地帯

なぎえの春 人々が住み着いていた場所は日当たりの良い台地であるが、その一つが名記江村であった。現在の浪ノ上一帯であり、稲荷山古墳からは当時の土器も出土している。

名記江の地名は浪ノ上熊野社の棟札に、表は「大宝二年 熊野十二社大権現宮 名記江村 壬寅九月□日」、裏に「行基菩薩 建立」とあり、これが最も古い資料である(大宝二年とあるが、後世記されたものであろう)。名記江はやがて楯江となり、さらに波上、波之上、浪ノ上と変化したと伝えられている。また、浪ノ上には最先住と伝承される浮野の姓があり、楯の江と関連あるとも推察される。

「ナギノエ」と「ナギノ」の関連を言及すると興味深いものがある。

他説には「ナギ」の語源として、焼畑地名を表す「ナギ野、ナギ畑」や、崩れた崖の「ナギ場、凧の江、水草のナギ、熊野神社のナギの木」なども挙げられている。いずれにしても、三河湾に注ぐ豊川の幾筋もの流れや、河跡の池沼を広く眼下に見渡せる場所と深い関連があったことは間違いのないであろう。



熊野神社の棟札

### (2) 街道と豊川の水運

別所街道 鎌倉に幕府が置かれると、征夷大将軍の住む鎌倉と天皇のいる京都との間の交通が頻繁となった。現在も残る主要な街道としては、白須賀から二川を通り、今橋(豊橋)を抜けて国府・御油へと続く東海道があり、三ヶ日から本坂峠を越えて嵩山に出、和田を抜けて豊川へ行く本坂道(ひね街道)がある。

牛川を通る街道としては、本坂道の和田から東海道へと抜ける道があり、別所街道と呼ばれていた。別所街道は牛川を南北に縦断する旧街道で、通称「往還」と呼ばれる。浪ノ上村には往還を挟んで両側に池があった。その形から眼鏡池と呼ばれ、道するべの一つとなっていた。眼鏡池のほとりに大きな松が3本そそり立っていたのも、今は懐かしく思い出されよう。

別所街道はさらに南進して青陵中学校正門前の坂を下り、坂上橋からさらに坂を下って沖野の低地へと進み、飽海へ達して、豊橋の町へ出るのであった。

**鎌倉街道を往く** 鎌倉時代の主要街道として、二川から豊川へと続く東西の道「鎌倉街道」があった。鎌倉街道は中世の古い道筋であり、牛川もその一端を担って、物資や文化の流通に重要な役割を果たしていた。先人の研究によれば鎌倉街道のルートは次のようである。

二川から普門寺の山を越えて多米に入り、駒止の桜、鞍掛神社、赤岩寺を経て再び山道に入る。鷹丘校区の乗小路へと出て、忠興八幡社を横切り、竜雲寺の前を西に向かう。



むかしからの古い道

三菱レイヨンの敷地内を通過して豊川信用金庫付近に出る。旧道の別所街道を横切り、さらに近田ふとん店の前を西に向かい、坂を下り、牟呂用水を横断して桃林寺の前に出る。桃林寺のすぐ横を北上して正太寺の東を牟呂用水に沿って北上し、浪ノ上熊野神社の付近に到達する。その辺りを谷口（矢口）と称し、船着場になっていた。

一方、三菱レイヨンに入った街道は別れて北西に進み、眼鏡池へ出て、猫淵川（眼鏡川）沿いに西進して正太寺へ到達する別ルートもあったと推測されている（尾藤卓男著「鎌倉古道幾山河」）。

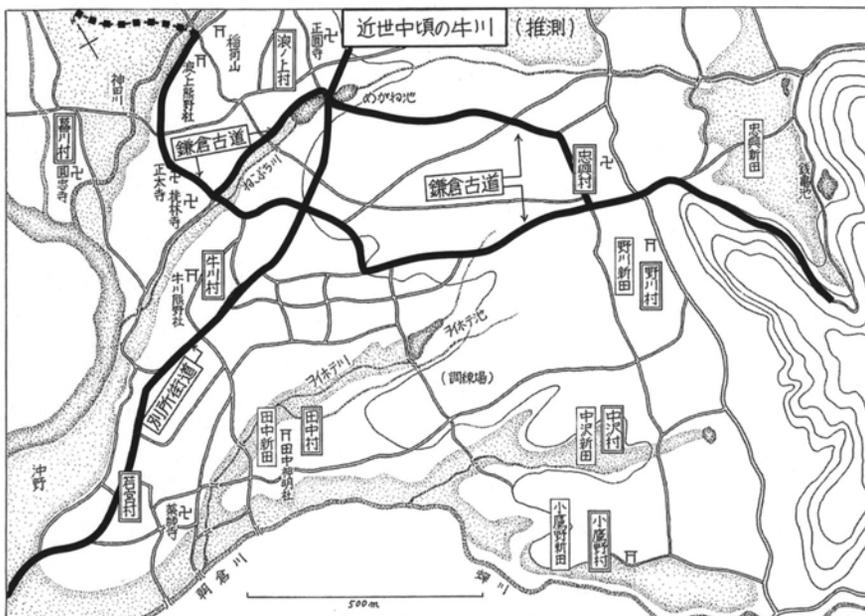
古い道筋は、つい最近まで残っていたが、現在はほとんどその面影がない。

**豊川を渡る** 旅人にとって川は大きな障害となっていた。牛川を流れる豊川も同様で、旅人は豊川を越すために大変難儀をした。豊川は昔から幾度となく流路を変え、低地を自由きままに流れていた。人々は渡船を利用したり、上流の浅瀬を探して渡り易い場所を選んで渡って行った。貞応2年（1223）の「海道記」や仁治3年（1242）の「東関紀行」を見ると、西から東へ向かって、赤坂宿—豊川宿—豊川渡渉—峯野の原—高師山という行路が一般的であったことがわかる。この「峯野の原」の場所こそ「地理的に考えると牛川あたりであろう」（久曾神昇「豊橋市史」第1巻）と推察されている。

「古宿（豊川市古宿町）から船出し向こう岸に着船した時、太陽が野草の露の間から出

て輝き、雲は松の風にたなびき、山の色合いが空と一体となっている。素晴らしい遠望で感動的だ（意識）」と海道記には記されている。

豊川はまた上流と下流との物資の運搬にも使われており沿岸には船着場もあった。江戸時代になって石灰石を積み出した後藤河岸もその一つであった。



別所街道と鎌倉街道の道筋（尾藤卓男著「鎌倉古道幾山河」より）

### (3) 街道沿いの古刹

**瑠璃光院と薬師如来** 大宝2年(702)持統上皇が三河行幸をしたという事実に基づいて伝承されているのが「楮江村神鎮山瑠璃光院莊園寺譜」であり、貞享3年(1686)の書が残っている。上皇が豊川の流れを渡るとき、崖上の名記江村に光る木材を見つけた。利修聖者に命じて薬師如来像を刻ませ、これを祀る草庵を建て、神鎮山瑠璃光院と称したとある。

“大宝2年”という年号は確定できないが、正圓寺に残る薬師如来像は東三河地方で最も古い仏像の一つであり、弘仁期(810～)の作と考えられている(「豊橋市史」第1巻)。したがって平安時代にはこれを祀る草庵が建てられていたことは間違いなからう。場所は浪ノ上熊野社の隣で、眼下に豊川の流れを見下ろす景勝地であった。

鎌倉街道沿いにできた当時の社寺としては他に桃林寺と浪ノ上熊野神社も挙げられる。しかしともに確かな資料は現存していない。

### (4) 武将の城跡

**戸田六太夫のすまい** 文明10年(1478)頃、田原城主の戸田宗光は東三河一帯に勢力を誇示しており、仁連木村(東田町)にも城を築いていた。宗光は、楮江村に別荘を構え、瑠璃光院の堂宇を再興して莊園寺と改め、薬師如来像を安置した。子孫戸田六太夫の代になって戸田氏は楮江村に定住した。屋敷は現在の牛川育英幼稚園の所といわれ、今でも僅かながら、とりで砦を築いた堤や戦国時代の濠の跡が残っている。



戦国時代と推定される土塀(正圓寺)

### (5) 寺社の建立と発展

**瑠璃山正圓寺**は、今は姿を消した眼鏡池の北側にある。森と竹藪に囲まれ、幼稚園児たちの元気な声が毎日響いている。

創立は平安から鎌倉時代と思われるが確証はない。古く瑠璃光院と称したが、元和3年(1617)浪ノ上熊野神社から戸田六太夫の居城であった現在地浪ノ上に場所を移し、吉田藩主から黒印地8石を受領した。延宝年中(1673～)には名を瑠璃山正圓寺と改め、妙心寺の直末として栄えた。本尊薬師如来像は地藏菩薩像とともに信仰を集めていた。



正圓寺  
(牛川町浪ノ上)

**牛河山桃林寺**は、牛川小学校のすぐ北側。稲田から山門に続くひなびた石段のたたずまいが、つい最近まで往時を偲ばせていた。

桃林寺は牛川村の発祥に由来すると思われる。年代は定かでないが、中世、鎌倉街道や牛川の渡しとともに栄えた所であろう。もと天台宗であったが、永和年中(1375～79)に悦宗和尚が再興し、嵩山正宗寺5世陽岩禅師を請じて開山とし、その末寺となった。江戸時代には黒印地3石を有していた。

郷土史家石川一美もこの地を愛していた。



桃林寺  
(牛川町西側)

<sup>さん やさんやくしじ</sup>  
三野山薬師寺は、青陵中学校の南門を出てすぐの所にある。東部丘陵の山並みや朝倉川が間近に見え、眺めもよい。

薬師寺は比叡山延暦寺派の末寺。本尊は薬師瑠璃光如来である。室町時代の創建ともいわれるが裏付ける資料はない。明治時代以前は寺領の収入で学問僧の修行道場になっていたが、その後、信者寺となり、四国霊場八十八箇所の石仏の奉納もあった。護摩供祈祷により近郷近在の信仰を集め、檀家制度から外れた寺院形態をとっている。



薬師寺

(牛川薬師町)

<sup>せきちゆうさんしょうたいじ</sup>  
積忠山正太寺は、牛川小学校から暮川への道を東に入ったところにある。手入れの行き届いた落ち着いた庭には常に四季の花が咲き、心が静まる。

正太寺は、天正19年(1591)下地町にある真宗高田派の聖眼寺13行順法師が開山となって創立された。もともとは聖眼寺に縁のある大明寺と称する寺であった。行順法師は聖眼寺から持参した聖徳太子像を祀り、家康とも意を通じ、黒印地2石を頂戴した。境内に画家で11世住職の大河戸晚翠碑がある。



正太寺

(牛川町西側)

<sup>せい が さんえんちゆうじ</sup>  
清河山圓忠寺は、暮川の町の入口にあり、神田川の岸辺に静かなたたずまいを見せる。本堂前の藤の古木が歴史を物語っている。

圓忠寺は真宗高田派の寺として、慶安4年(1651)暮川村に創建された。当初は清原山と称したが、江戸末期現在の清河山に改められた。本尊は阿弥陀如来立像であるが、牧野右馬允成定の念持仏であった太子像も祀っている。境内には聖眼寺ゆかりの古鐘もある。無銘ではあるが名鐘として戦時中の供出を免れた。



圓忠寺

(牛川町川垂)

熊野神社(浪ノ上)は、眼下に暮川の水田地帯を見下ろす崖上にある。うっそうとした森は近年整理され、社も新築された。古くから人々の信仰を集めていたことは確かであり、石巻神社との関わりも指摘されている。熊野三所権現や十二社(社殿の裏手の12個の石)への信仰も篤い。寛永12年(1635)の棟札や宝永8年(1711)の銘が刻まれた御神刀も残されている。



熊野神社(牛川町西郷)

熊野神社(中郷)は、牛川小学校と牛川保育園との間にある。シイやヒノキの木立ちに囲まれた林の中は、子どもたちの歓声がよく聞こえて来る。

ここは熊野三社大権現または若一王子社と称し、古くから信仰されていたようである。江戸時代には黒印地2石を受けていた。

明治5年の神社制度によって熊野神社と改め、熊野三神を祭神として村社となった。明治41年に偏戸社と豊寿稲荷を合祀した。今も続く春祭は合祀された豊寿稲荷の豊年祈願祭、秋祭は本社熊野神社の豊年感謝祭である。



熊野神社

(牛川町中郷)

**素盞雄神社**は暮川村の村社である。暮川村は戦国時代、西下条の八反ヶ谷村・五井村の枝村として開発されたところであり、神社もその頃の創立と思われる。承応元年(1652)の棟札には暮川開発人6名の名が残っている。また社宝の鬼面は室町時代の作で棟止めの魔除けと考えられる。



素盞雄神社

(牛川町宮脇)

浪ノ上稲荷社は神田川を見下ろす小高い丘の上にある、花咲く多くの草木に囲まれている。創建は不明であるが、享保14年(1729)の「浪上村家由緒書」が残っており、社殿はなかったものの祠はあり、稲荷大明神の祀られていたことがわかる。境内には郷土研究の先達丸地古城の歌碑が建っている。



浪ノ上稲荷社  
(牛川町西郷)

田中神明社の創立は明らかでないが、宝永5年(1708)頃、伊勢の松坂から来た松坂家が田中新田を開発したとき、神明社を創立し、天照大神を祀ったのが始まりと思われる。

豊寿稲荷は嘉永3年(1850)、吉田藩主の相次ぐ不幸や藩中の災難が稲荷の祟りだと恐れら



田中神明社(牛川町田中)

れ、吉田城の鬼門に当たる地(現在の青陵中学校の校地)に創られた。しかし昭和3年、大きな石鳥居も石灯籠も、立派な彫刻も本殿とともに中郷熊野神社に移転された。

偏戸社の創立は明らかでないが、黒印地2石を寄進されていた。牛川町西側にあり瓦葺社



豊寿稲荷の彫刻と石灯籠

殿があったが、明治5年(1872)無格社となり、同41年(1908)中郷熊野神社に合祀された。

これらの他に今では鷹丘校区となったが、新田開発にともなって忠興山竜雲寺・忠興八幡社・小鷹野神明社・野川神明社・中沢神明社も江戸時代に建立されている。

(寺社スケッチ 高橋 規夫・画)

### 3 近世の牛川

#### (1) 吉田藩の施策

氾濫する豊川 江戸時代を通して牛川は吉田藩領下にあった。吉田藩は牛川村・浪ノ上村・暮川村など39か村を包括する八名郡と、渥美・宝飯・額田・賀茂の4郡、さらには遠江国や近江国の一部も所有する7万石の大名であった。譜代大名であったので小藩ながらも老中を始めとする幕府要職につく身分であった。この吉田藩主にとって、豊川の洪水から城下を守ることは常に大きな課題であった。

牛川を滔滔と流れる豊川。枯れることなく常に満々と水を湛えている。それだけに、上流域に大雨が降ると水量は一気に膨れ上がる。水量に比して川幅が狭いので、大きく蛇行しながら凄まじい勢いとなって流れ下る。堤防が決壊して、吉田の町は大洪水になってしまう恐れは十分にあった。満潮時と重なった時など田畑の流失だけでなく人家も破壊されて多大の被害に襲われたことも幾度かあった。

霞堤と牛川 そこで考え出されたのが霞堤（鎧堤ともいう）であった。あらかじめ堤防の数か所に切れ目を作って開けておき、出水

が多くなるとそこから自動的に水が外へ流れ出る仕組みであった。田畑に流れ込んだ水はしばらくして干潮とともに引いていき、城下町を水害から守ったのである。

記録に残る大洪水は、15世紀から豊川放水路のできる昭和44年（1969）までの560年間に、64回あった（藤田佳久著「生きている霞堤」）。9年に1回は大洪水とそれに伴う水害におびやかされたことになる。

霞堤の完成により吉田城下は水害から守られた。しかし遊水池となった沖野や暮川の田畑はその度に水につかった。土砂の堆積によって農業に適した肥沃地になるという一面もあるが、その時の作物は壊滅してしまう。特に暮川に住む人々にとっては、道路も水につかって交通手段も奪われることになり、日常生活にも大きな影響を与えていた。



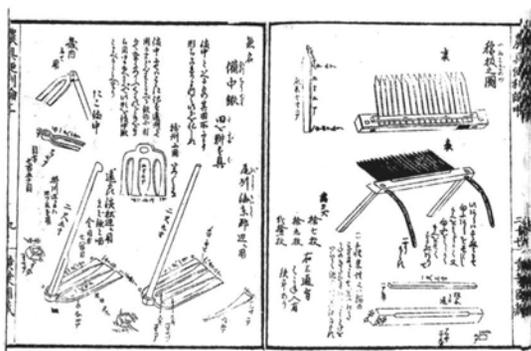
昭和13年の大洪水



市役所から見た霞堤と沖野

## (2) 新田開発と村人のくらし

**農業技術の進歩** 江戸時代に入ると農業技術が格段に進歩した。備中鍬の発明により人力での深耕が可能となり、荒地の開墾がしやすくなった。馬や牛による代掻きなども行われるようになった。脱穀には千歯扱きが急速に普及し、それまでの扱箸の10倍の能率をあげるようになった。唐箕・千石どおしなどの改良も見られ、農作業の能率が一段と向上した。



改良を加えられた農機具 (「農具便利論」)

肥料は人糞尿のほか、刈敷や作物のくきがらが広く用いられた。屋根に使用した萱・藁や鳥糞・古い壁土なども用いられた。また水利や栽培技術の進化、病虫害の駆除なども研究された。作物も米だけでなく、麦・粟・稗・大豆・なす・芋・瓜などの作物も作られるようになった。

**新田開発** 藩の政策とも連動して牛川の各地に見られた湿地帯は相次いで開発され、米作りに可能な土地に開発されるようになった。まず、忠興新田(現鷹丘校区)が開発された。これは正保年間(1644～)吉田藩によって開かれたものであり、銭亀池も造られた。さらに小鷹野新田・中沢新田・野川新田が開発された。

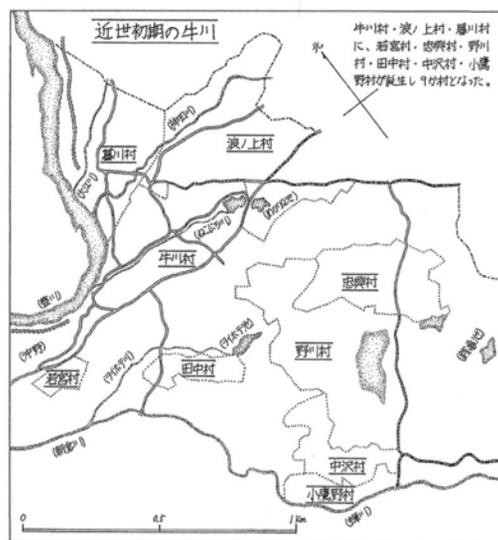
牛川村内の開発としては田中新田がある。田中新田は飽海に住んでいた松坂家が開発したもので、宝永5年(1708)に完成した。5代目松坂幸左衛門は文化2年(1805)田中新田の地に転居し、以降松坂家は牛川に定着し

た。質屋を営んで富豪となり、名家としてその名を馳せた。

若宮村は天和2年(1682)、飽海村から移住した村越家と2軒の朝倉家が開発し、貞享3年(1686)検地を受けた。この3軒は吉田城内の若宮八幡の氏子であったので、新しく開発したこの村を若宮村と呼ぶようになった。

暮川村はもと西下条村の一部であったが中世の末に開かれ(古新田)、承応年間(1652ころ)には暮川村として開発されていた。

このように牛川も、中世末期から開発が始まり出し、近世初期から中期にかけてめざましく開発された。江戸時代の初めころは、浪ノ上村・牛川村・暮川村の3か村であったが、新田の開発により、若宮・忠興・野川・小鷹野・田中・中沢の6か村が開発されて、牛川は合計9か村となった。



9か村になった牛川村

**苦しい生活** 江戸末期の頃の戸数は牛川全体でも180軒程度であった。住んでいる人々のほとんど

は百姓(農民)

であり、

田畑を耕 安政5年戸数調べ(「豊橋市史」第2巻)して年貢米を差し出していた。吉田藩領の検

	家数	男	女	計
牛川村	105	249	227	476
浪ノ上村	24	49	61	110
暮川村	38	73	77	150
田中新田	6	13	5	18
若宮村	※飽海村と合同のため不明			

地は慶長9年(1604)から度々行われて村の石高が決められ、それに基づいて年貢の率が決められ、村人はぎりぎりの生活を余儀なくされていた。

嘉永5年(1852)浪ノ上村庄屋の戸田六太夫は、「伝来の土地200石のうち半分を処分してきましたが、去年の出水で田畑の出来も悪く年貢が払えません。山林や家財道具も売り払い、手づるを頼って借金もしましたが何ともなりません。百姓をしてくれる人をどうか探してください」という嘆願書を出している。村役人も「このままでは村全体が減んでしまいます」と添え書きするほどであった。

**助郷の負担** 村人には宿場への労力負担の義務もあった。東海道筋の宿場には百人百疋の制度があり、公用の旅人のため、常に人足百人・馬百頭の準備が義務づけられていた。宿場だけではまかないきれないため、助郷といって近隣の村々に不足分の人馬の提供を要求した。暮川村・若宮村からは吉田宿へ助郷として出かけたが、牛川村・浪ノ上村は二川宿まで出かけることになっていた。

幕末の  
ある年7  
月29日、  
人足触が



牛川に届いた人足触

二川宿から届いた。「今晚10時、34人。二川宿まで人足を出せ。刻限に絶対遅れるな」との指令であった。年を追って交通量も増え、大名行列などの大きな通行は農繁期とも重なることが多かった。しかも全て手弁当であったので村々の負担はとても大きかった。

**入会争論** 村人たちが生活に必要な薪や草などを採る場所を入会地という。堆肥や燃料や牛馬の飼料の確保のために不可欠な場所であった。延宝8年(1680)には牛川村と神ヶ谷村の間で争いが起きた。寛政7年(1795)には、若宮村・牛川村・浪ノ上村の間で、天保

4年(1833)と7年には神ヶ谷村・牛川村・浪ノ上村・飽海村の間で下草や地境いをめぐっての争いが起きた。

入会の争いは、長引くと村の死活問題にまで発展し、さらに問題がこじれて後々まで尾をひくこともあった。

**寺請制度** 江戸時代、人口の流出を防ぎ、キリシタン禁制の徹底をはかるため、寺請制度が設けられ「宗門人別帳」が作られた。戸主をはじめ家族・奉公人など全員がいずれかの寺の檀家となり、年齢も明記された。村人たちは勝手に土地を離れることは許されず、旅に出るのにも檀那寺の証明が必要であった。

「この権吉と申す者は禅宗正圓寺の檀家に違いありません。西国巡礼に出かけているところですので関所を通してください。もしどこかで死んだ場合も放っておいてください」という往来手形を発行してもらった。



百姓往来手形

**寺子屋** 村の子どもたちの教育機関として牛川に2つの寺子屋があった。

正圓寺で開かれた寺子屋は豊橋付近では最も古く延宝8年(1680)である。寺子屋に通う子どもは筆子と呼ばれるが、常時16人ほどであった。

正太寺の寺子屋は宝暦13年(1763)に開かれた。筆子は常時25人ほどであった。ともに寺の住職が師匠となり、主に習字を教えた。師匠の書いたお手本を見て、それをまねして書き、直してもらおうという方法であった。また文字の読み方も教えてもらい、3年から4年の間で、日常生活に必要な文字を習い終えたようである。

### (3) 村の風習

江戸時代、吉田藩士中山美石<sup>うまし</sup>は幕府からの問いかけに対し当地方の風習を次のように答えている（「参河吉田領風俗」）。

**正月** 「農家も正月に鏡餅を供えるのか」との問いに、農家が神仏を尊信することは、元来武士や商人より勝っている。家の神だけでなく、地の神・山の神に、馬を持つ者は馬頭観音に、さらには鍬・鎌・臼にも必ず鏡餅を供えると答えている。

**盆** 変わった慣わしとして、盆前に死んだ者には抱六<sup>ほうろく</sup>（素焼きの土鍋<sup>なべ</sup>）を頭にかぶせて葬る習慣があった。あの世へ行く途中で精霊に行き会った時、オレたちは娑婆<sup>しゃば</sup>へ行くのにオマエはなぜ冥途<sup>めいど</sup>へ来るのかと頭をたたかれる。抱六がないと頭が痛い。「いとおかしきことなり。されど郷村にては必ず用ひる」と書かれている。

**子どもの遊び** 9月の重陽<sup>ちやうよう</sup>の節句に、女の子たちはオカヅラ人形を作って遊んだ。かもじ草を手で揉んで柔らかくし、女性の髪のように結いあげる。紙に顔を描いて竹筒に巻きつけ、お膳を供えて遊んだ。



オカヅラ人形

男の子は野山や田畑を駆け回って遊んだ。日の暮れるまで大勢の仲間と遊び、たくましく成長していった。

**ウンカの災い** 稲の害虫ウンカが発生すると村をあげて退治にかかった。松明を多く灯し、鐘や太鼓を打ち鳴らし、「ウンカノカアミョウオオクレヨ…」などの呪文を唱えながら畦道<sup>あぜみち</sup>を回る。最後は川原に集まって松明を一つに重ねて焼く。ウンカはその火に焼かれて死ぬのだった。

### (4) 信仰や伝説

村人たちは自然界のあらゆることに畏敬の念を抱き、たたりを恐れ、崇拜の対象とした。それらは地藏や観音・道祖神<sup>みちのすけ</sup>・塞の神<sup>さいののかみ</sup>・歯の神などさまざまな信仰を生み出した。また不思議な現象をとらえて話を作り、語り継いだ。

熊野神の漂着<sup>すさのお</sup>・素盞雄神<sup>すさのお</sup>の示現・テボウの逆さ松といった伝説、牛川万歳<sup>まんざい</sup>・半の木の村芝居といった芸能、稲ノ場の狐火やお椀<sup>わん</sup>こじきなど、牛川には昔から様々な話が言い伝えられている。「お弓橋」のように幾通りか残っている伝説もある。

**庚申さま** 庚申<sup>こうしん</sup>の夜、体内にいる3匹の虫が人の眠っている間に体を抜け出、天帝に罪過を報告する。だからその夜は眠らずに、仲間と語り明かすという風習があった。庚申講といい、その夜のために、膳や椀<sup>じらおけ</sup>・汁桶<sup>かほ</sup>や鉦（円形で平たい鐘）などを備品としてそろえていて、当番が管理していた。庚申の夜には仲間が集い、念仏をした後で食事や雑談を楽しんだ。

かつてはかなりの場所で「お庚申さま」が行われていたが、今ではほとんど解散してしまい、現在は浪ノ上<sup>なみののうへ</sup>の一部で、数軒の仲間が継続しているに過ぎない。

庚申信仰の本尊青面金剛<sup>しょうめんこんごう</sup>をまつる祠を庚申



浪ノ上に残る庚申堂

堂と呼び、洗島・中郷・浪ノ上などに残っている。

**秋葉講** 秋葉信仰は火伏せの神として、江戸時代中期から盛んになった。今でも牛川の各

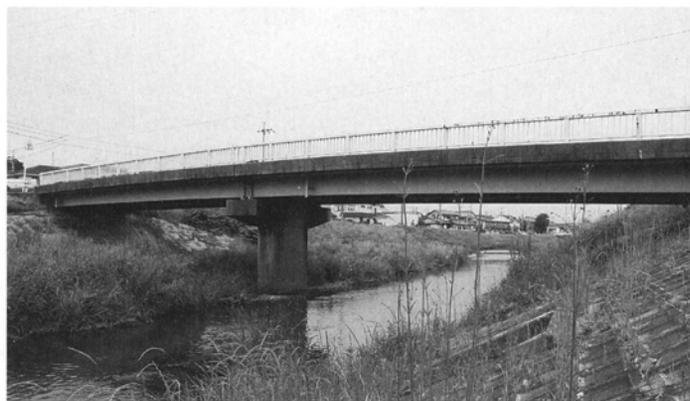
地域では、毎年遠州秋葉本社に代参を立ててお札を受けてきて各家庭に配っている。牛川の秋葉社や常夜灯はかつては別所街道にあったが、昭和43年、中郷熊野神社に移された。



中郷に残る秋葉社と常夜燈

**お弓橋①** お弓は牛川の庄屋の娘。朝倉川の向こう岸に住む三味線の師匠と恋仲になった。大雨が降ると川を越せないの、お弓は下男に命じて小さな橋を架けさせた。しかし、行く末を案じた父親の大反対にあい、お弓は悲しみのあまり井戸に身を投じてしまった。悲観した師匠も朝倉川に沈んだ。師匠の水死体が発見されたその夜から、橋の上に2つの人魂ひとたまが現れ、狂おしげにもつれ合いながら飛ぶようになったという。

**お弓橋②** お弓は遠州新居の甘酒屋の娘。松坂家の番頭恭右エ門そぼめの妾であったが、瓦町の吉見惣介という三味線の師匠と深い仲になってしまった。お弓は師匠が瓦町から通って来



現在のお弓橋（昭和53年架け替え）

るのが何よりうれしく、いつも心待ちにしていた。しかし雨後は朝倉川の水量が増えて渡ることができなかったので、お弓は下男に命じて、橋をかけさせた。道板2枚並べただけの粗末な橋であったが、みんなの興味を引き、だれ言うとなく「お弓橋」とよばれるようになった。

**キツネつき** 洗島の老婆にキツネがつき、寝

ついてしまった。油揚げや豆の飯を食べたいとせがむ。見舞いの人があると喜んで長篠合戦の話ななせあひせんを詳しく話す。知人が門口まで来ると、納戸なんどに寝ていても誰々が来たと言い当てて気味が悪い。親類の者がキツネを取るために遠州春野山のお符を受けてきた。寝床に置くとキツネは取れて老婆は平常に戻った。が、幾日も経たぬうちに老婆も死んでしまった。

**名記江の二尊像** 名記江なきえの里に来た行基は、薬師如来像の右ひじを補修し、草堂を建てて安置した。すると近くの深い淵に潜んでいた神竜が夜な夜な灯火を捧げるようになった。その後、空海（弘法大師）が菩薩像を刻んでこの草堂に安置した。子安地藏こやすみ・痘地藏いもやみ・カサ地藏・鎮火地藏とも呼ばれ、村人は名記江の二尊像と呼んで信仰した。

**若宮の鶴塚** 薬師寺の西方120mほどにあった共同墓地の近く。一羽の鶴がお札をくわえて飛んで来たが、松の木から落ちて死んでしまった。それを祀った小さな塚が共同墓地の

近くの鶴塚である。

#### 牛川人形の末路

松坂家の分家筋に浄瑠璃の達人吉田玉五郎がいた。大坂の人形浄瑠璃の本場文楽座で本格的に修行し番付にも載るほどであった。腕はすこぶる

よいばかりか、人形の頭衣装から自分たちの袴かほしもまで金に糸目をつけず調達するほどで、牛川人形はこの地方の王座を占めて評判をとっていた。しかし、片腕の玉次郎に死なれ、一座の中堅も独立して分裂し、湯水の如く使い続けた金も底をついてしまった。金目いとわず集めた人形も衣装も人手に渡り、今牛川には何も残っていない――。

## 4 明治から昭和初期

### (1) 八名郡時代の牛川

**八名郡下川村の誕生** 慶応3年(1867)10月、江戸幕府が滅んだ。翌年には元号が明治と定められ、矢継ぎ早に様々な改革が断行された。

吉田藩は豊橋藩、そして豊橋県と改称した。続いて額田県、やがて愛知県に吸収併せられた。行政区画改変の波は牛川にも及び、明治9年(1876)暮川村を除く8村が一つになり、八名郡牛川村となった(同25年、暮川村を下条村から編入した)。さらに同39年(1906)には、牛川村は下条村と合併し。両者の一字ずつを採って下川村となった。八名郡下川村の誕生である。

下川村の役場は西下条五井の瑞龍寺内にあったが、暴風雨の際の洪水で大きな被害が出たために、役場改築問題が起きた。牛川部と下条部との長期にわたる綱引きの末、大正11年(1922)、牛川下野地内の高台(現忠魂碑前)に移された。

**牛川学校の創立** 明治新政府が力を入れたのは、次代を担う子どもたちの育成であり、明治5年(1872)、学制が公布された。これに伴い寺子屋は廃止となり、豊橋では東・西・南・北の4郷学校が開校した。牛川でも郷学校の開校準備を進め、看板まで作った。しかし開校するまでには至らず、翌6年、第9中学区第42番小学牛川学校として設立された。初代校長は大河戸晩翠であった。

当初は正太寺本堂を仮校舎とした。同13年(1880)仮校舎を桃林寺本堂に移した。学齢に達した人数は165人であったが、実際通学したのは65人(男50、女15)に過ぎなかった。現在地に校舎を新築したのは翌14年のことであった。

明治33年(1900)には小学校4年間が義務化され、35年(1902)には高等科が設置され

て牛川尋常高等小学校となった。まもなく6年生までが義務教育となり、ほとんどの子どもが国定教科書で教育が受けられるようになった。

**軍隊の射撃場** 明治から昭和にかけての豊橋を象徴するのは、「軍都」であった。明治18年(1885)、吉田城跡地に歩兵第十八聯隊が置かれ、町は常に軍人でにぎわっていた。

農家にとっても兵営から出る人糞・馬糞は貴重な肥料であり、大八車を引いてもらいに行く毎日であった。

牛川には、歩兵の射撃訓練のための射撃場がつくられた。かつて吉田藩の鷹狩りの場であった「お鷹野」であった。射撃場は、現在の桜丘高等学校敷地から東へ1,200m、南北200mの土地が選ばれた。

**牟呂用水の開通** 明治21年(1888)に牟呂用水が開通した。八名郡一畝田村の取水口を起点にした牟呂用水は、この地域では、豊川の河岸段丘の縁に沿って地内の中央を貫き、テボ松に至る。ここから飽海までは沖野の沖積低地が広がっていたために、堤防を高く築きあげて用水を引いた。

この堤防上に、用水に沿って道路が開かれたが、沖野方面から強烈な寒風が吹き上げ、従来にもまして寒い道となった。



沖野低地に築かれた堤防道路(左上)と牟呂用水

**耕地整理** 暮川村・下条村一帯の下条田面は奈良時代に条理制が行われていたが、排水が

悪く、麦などの裏作ができない湿田であった。かといって、稲作に必要な水量は神田川や大江川だけではまかないきれず、農道の数や幅も不十分であった。

そこで明治44年(1911)、下川村役場は下条田面の耕地整理に着手した。道路幅を拡張したり、用排水路を整備した。その結果、耕地の近くまで荷車が入るようになったり、二毛作も可能となり、農業経営も安定してきた。それでも水量はなお不足しがちで、自主的に水当番などを組織してしのいだ。水利の確保は昭和19年(1944)の豊川伏流水の汲み上げ工事完了まで待たなければならなかった。

他方、沖野地区一帯は洪水の度に冠水したために、肥沃地で、牛川の穀倉地帯となっていた。水利は眼鏡池を源とする猫淵川と朝倉川であったが、下条田面と同じように用排水路や農道の整備が必要であった。

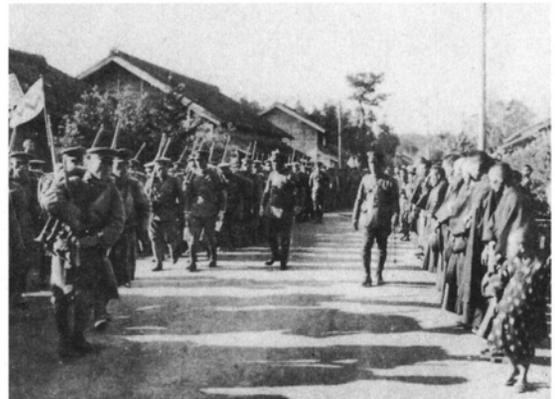
そこで大正8年(1919)、関係地主の協議によって沖野耕地整理組合を設立し、翌年には耕地整理を着工し、同14年に完了した。しかし、牛川芋の主産地であった自然堤防の畑地は、昭和33年(1958)の土地改良まで昔のまま残された。

## (2) 豊橋市への編入

**昭和の初め** 昭和2年(1927)、秩父宮が下川村を訪れ2泊した。土産にさしあげたのはナガイモ・マツタケ・柿であった。いずれも地元の特産品であった。

翌3年11月、昭和天皇即位の御大典を記念して下川村は次のことを決めた。①11月10日、一般村民は休業のこと、②小学校で行う奉祝式には、各戸1人必ず参加のこと。③午後5時からの提灯行列には、児童も職員も全員参加のこと、④寄付金を集めて図書館と神饞田を設置すること。

下川村役場で行われた御大典祝賀会には村



「秩父宮殿下御通行中」(牛川往還通り)

民全員が参加し、汁粉・阿部川餅・だんご・菓子の店も出、山車や餅投げもあって大変なにぎわいであった。

**献穀田の荣誉** 昭和5年(1930)、宮中で行われる新嘗祭に供える米と粟を愛知県から献穀することが決まり、八名郡がその奉耕事業を受けることとなった。八名郡町村長会は、八名郡農会と協議し、奉賛会を組織して予算1,700円を計上した。献穀田の適地を下川村に内定し、下川村の村長矢野宗治を奉賛会長に任じた。

下川村では、村を挙げて名誉ある行事に取り組みこととし、献穀者・奉耕者・奉耕指導者などを選び、会則を作り細部にわたって組織固めをした。

献穀田は桃林寺前の西側100番の地が選ばれた。4月28日の清祓式に始まり、地鎮祭・播種祭・水口祭と続いて御田植式となった。6月9日の御田植式には、県知事代理・県農会長をはじめ、来賓だけでも各村長や農会長・小学校長ら70人を超え、古式に則って行われた。御刈穂式は、9月25日、県知事以下県神職会主事・農業試験場長・豊橋警察署長・奉賛会役員・献穀者・奉耕者・早乙女・唄女、さらに小学生や青年団・在郷軍人などを招いて盛大に行われた。続いて脱穀式・精白式と続いた。献穀米は、県庁において献納したほか、熱田神宮・伊勢神宮・明治神宮・

とが  
砥鹿神社・赤坂表御殿・八名郡76社に納められた。



献穀田の御刈穂式（昭和5年）

御田植・御刈穂や初摺りに際しての唄や踊りもいくつか作られた。笛太鼓に合わせて舞いながら、にぎやかに、かつ、おごそかにとり行われ、ラジオ放送でも紹介された。

「うれし下川瑞穂の国の 秋に先立つ御田の稲。稲は万歳万代までも 八名の下川名に残る」  
「私しゃ早乙女 田に出りや武士よ  
赤い袴は だてにやせぬ。国の力をつなぐも  
解くも 引いた田植えの縄一つ」

まさに農業の村牛川の面目躍如の一大行事であった。

**豊橋市牛川町の誕生** 豊橋市が成立したのは明治39年（1906）。今からちょうど100年前である。豊岡村と花田村を合併し、市制を施行して豊橋市となった。大正12年（1923）、豊橋市は都市計画法の適用を受け、さらに近代化をはかるために周辺の町村を都市計画の対象とした。

八名郡下川村も豊橋市から合併の対象とされた。理由は市街化の拡張による住宅地の候補と、

上水道の水源供給地であった。

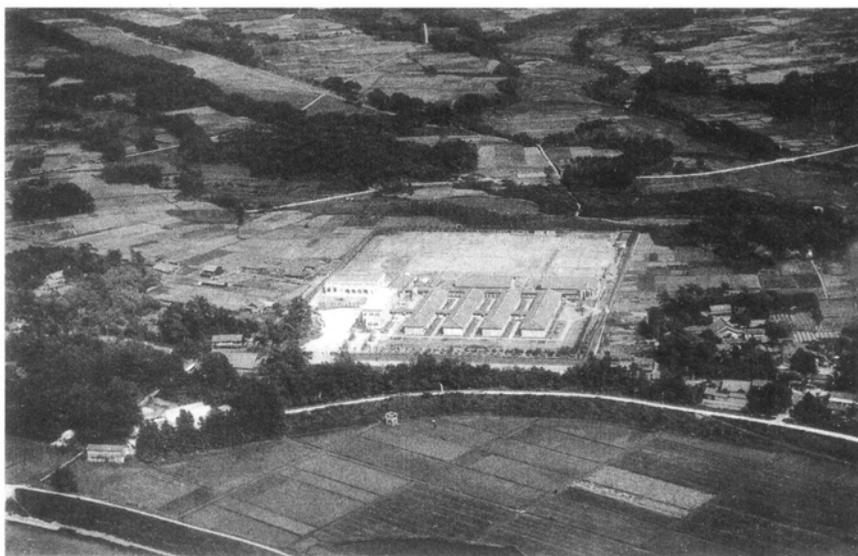
昭和7年（1932）、下川村は八名郡から豊橋市に区域編入となった。従来西下条に属していた暮川も編入され、豊橋市牛川町が誕生した。時の村長矢野宗治は、市と村内の間に立ちこれを円満に成しとげたのである。

隣接町村との合併を果たした新豊橋市は、面積を4倍増やし全国第5位となった。人口も1.4倍増え全国第18位となった。町数3倍、耕地面積7倍強という飛躍的な発展であった。

下川村役場に在職していた吏員はそのまま継続したが、役場は豊橋市下川出張所（翌年派出所に変更）となり、戸籍や財務の事務を行った。同8年3月には廃止されたが、役場の建物は豊橋支所の事務所として払い下げを受け、後、牛川農業協同組合の作業場として利用された。

**県立二中の校舎竣工** 大正15年（1926）、愛知県立豊橋第二中学校（旧制中学）が創立された。当初は市立商業高校の校舎を借りていたが、牛川の洗島の地（現青陵中校地）に校舎の建築が始まった。

昭和2年に一部が完成し、同6年には全校舎完成し、落成式が行われて移転が完了した。



豊橋二中の全景（昭和6年）

（左上は射撃場 校舎すぐ下の白線は牟呂用水沿いの道 左下は豊川堤防）

## 5 戦争のころ

### (1) 欲しがりません勝つまでは

**戦争と日常生活** 昭和12年(1937)、盧溝橋事件に端を発した日中戦争は拡大の一途をたどり、第二次世界大戦(太平洋戦争)へと突入した。国家総動員法によって軍需最優先となり、食料や衣料をはじめ日用品までが統制され配給制となった。言動も規制された。また、徴兵制が施行され、働き手である成人男子が戦地へ出兵したため、子どもまでが貴重な勤労者として扱われた。

農家では、米・麦・さつまいもなどの生産物が供出制となった。家族の割り当て分(保有食料)だけしか残らず、食べるのが精一杯の生活が続いた。また、すべての家庭に金属の供出が実施され、軍需に充てられた。特に、作業着となる綿織物の品不足は著しく、絹織物より手に入れにくかった。古着を仕立て直すなどでしのいだ。



各種の通帳(ほとんどの生活用品は配給制となった)

**牛川国民学校に改名** 昭和16年(1941)、尋常小学校は国民学校と改名した。国民学校では国定教科書のもとで天皇中心の歴史教育が行われた。奉安殿が作られ、御真影が掲げられて、直立不動で最敬礼することが義務づけられた。天皇に対する絶対の忠誠心を徹底させるためであった。高学年の子どもには、軍事

教練が課せられたり、農家への勤労奉仕や軍馬の飼料となる草刈り作業にも駆り出された。

運動場の大部分を掘り起こしてさつまいもやかぼちゃを植えたり、借りた水田で米作りをしたりして、食料不足を補った。大戦末期になると、牛川国民学校の校舎の一部や豊橋第二中学校(現青陵中学校)の校舎が兵舎として使われた。毎日のように鳴る警報のサイレンの度に授業は中断された。

### (2) 大地震の恐怖

**二つの大地震** 昭和19年(1944)12月7日午後1時36分、紀伊半島沖を震源とするM(マグニチュード)7.9の東南海地震が発生した。海溝型地震で、広範囲に大きな被害をもたらした。三重・愛知・静岡の沿海部では激しい揺れとこの地震によって引き起こされた巨大な津波に襲われ、1,223人の命が奪われた。牛川でも、屋根瓦が波打ってほとんどが崩れ落ち、立って歩けないほどの大激震であった。

加えて震度5以上と推定される余震が何日も続いた。多くの家庭では、庭先に竹と藁で作った仮設の「地震小屋」を建て、不自由で不安な生活を余儀なくされた。

さらに一か月後の1月13日午前3時38分、三河地方をM6.8の地震が襲った。内陸直下型地震で三河地震と命名された。範囲は狭いが震源地付近では震度7に達したと推定され、死者は2,306人に及んだ。余震の多さも特徴の一つで、M4以上の余震は90回以上も記録されている。

### (3) 豊橋空襲のとき

**空襲にそなえて** 昭和20年(1945)に入ると、大都市への空襲は激化した。人々は、戦火を避けるため子どもを疎開させたり、家財を田舎の親戚に預けるようになった。防空壕を掘って空襲に備えた。防空演習を行い、バケツ

リレーや竹槍訓練をした。灯りが漏れないように電灯の傘は黒い布でおおった。服には住所・氏名・生年月日・血液型を書き込んだ名札を縫いつけて万一に備えた。空襲警報は日常茶飯事となり、1機や2機の時は警報も出ない事態となった。疎開を受け入れていた豊橋の町自体が疎開する計画を立て、延焼防止の広い空地を作るため家屋の取壊しを始めた。そんな矢先、豊橋は空襲を受けた。

### 豊橋空襲の夜

それは昭和20年6月19日の真夜中。来襲したB29は136機と言われている。照明弾が真昼のように豊橋の町を明るく照らし出し、焼夷弾が降り注いで町中が火の海と化した。豊橋駅の貨車に積んであっ

た弾薬にも引火し大爆発を起こした。雨が降り出しほっとしたのも束の間、雨ではなく油とわかって、恐怖に追い打ちをかけた。

逃げ惑う人々に機銃掃射が容赦なく浴びせられた。朝倉川の土手には黒山のように人が右往左往し、水中に入って難を逃れようとする人もいた。沖野にも大勢が避難した。沖野だけでなく、牛川地内では若宮・浪ノ上・小鷹野・忠興などあちこちに焼夷弾が落とされた。牛川国民学校の講堂にも落とされたが、消し止めて焼失は免れた。

牛川国民学校は負傷者の収容所となった。火ぶくれになった乳房を泣き叫ぶ赤ちゃんに

含ませる母親がいた。射撃された弾が当たってぶらぶらになった腕を、麻酔も打たずに肩から切断しなければならぬ人もいた。

死者は624人、全焼・全壊家屋は市内全戸数の70%となり、市街地は焦土と化した。現実となった空襲を目の当たりにして、不安と恐怖はいっそう募るばかりであった。

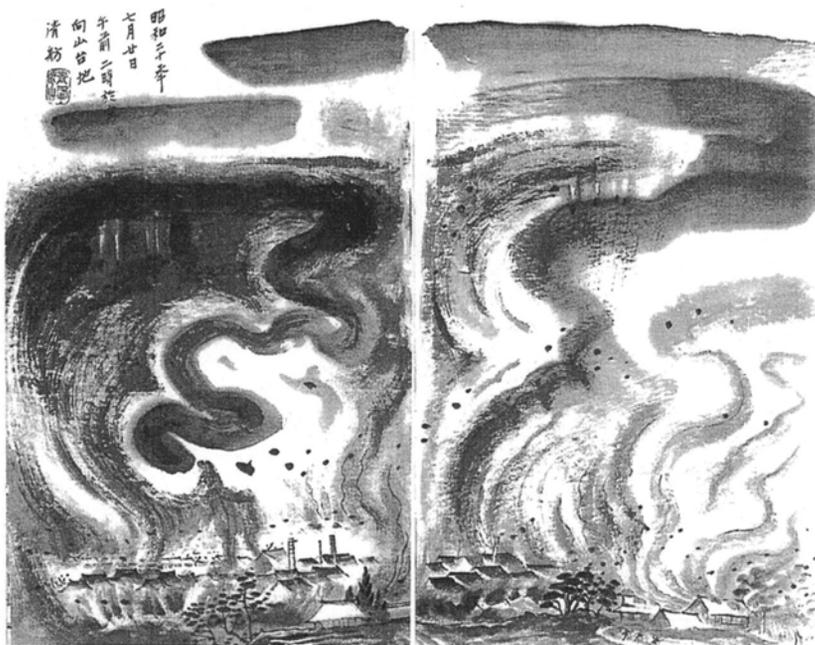
そして敗戦 豊川市には海軍最大の兵器工場があった。その海軍工廠には豊橋二中・豊橋

高女をはじめ豊橋市内からも多くの生徒が働きに出かけていた。昭和20年8月7日、3,256発の爆弾が彼らの頭上に降り注いだ。避難し切れなかった動員学徒ら2,500人余が命を落とした。その8日後、日本はポツダム

宣言を受け入れ無条件降伏をした。時に昭和20年(1945)8月15日。長く苦しく、大きな犠牲をともなった戦争が、敗戦という重荷を背負って終結したのである。

戦時下の食糧不足に加えて、この地方は前年が未曾有の水不足で稲作が壊滅的であったことから米は底をついた。小麦粉の団子(かゆ)を吸い物に入れた「すいとん」や粥で飢えをしのいだ。さつまいものつるまで食べた。

そのような状況下であっても、人々は復興に立ち上がった。出兵していた働き手もつぎつぎに帰還し、人々の生活は日に日に活気を取り戻していくのであった。



空襲を受け火災地獄となっている市街地(「高橋清舩日記・画帖」より)

#### (4) 敗戦後の復興

**買い出しとヤミ市** 敗戦直後は日本国中が深刻な食糧不足に見舞われていた。麦・雑穀・さつまいもまでが配給となり、主食品や生鮮食料品の入手は極めて困難だった。そのため廃墟と化した狭間公園や神明公園一带に“ヤミ市”が立ち、いもあめ・みかん・砂糖・たばこ・石けんなどが高値で売られた。豊橋駅は、中京方面や関西方面からの“買い出し”の人々や“ヤミ屋”と呼ばれる人々で溢れた。どの列車も大混雑であった。

牛川にも大きなリュックを背負って買い出しに来る人々が後を絶たなかった。さつまいもの季節が終わると、麦やじゃがいもが対象となった。極度のインフレのために、現金は役に立たず、着物や帯で支払う物々交換が日常的に行われた。

牛川小学校では戦時中から引き続いて運動場を畑とし、収穫したさつまいもや野菜を児童や職員の栄養補給に充てた。児童が帰宅後拾い集めたどんぐりを学校でまとめて、市へ供出したりもした。

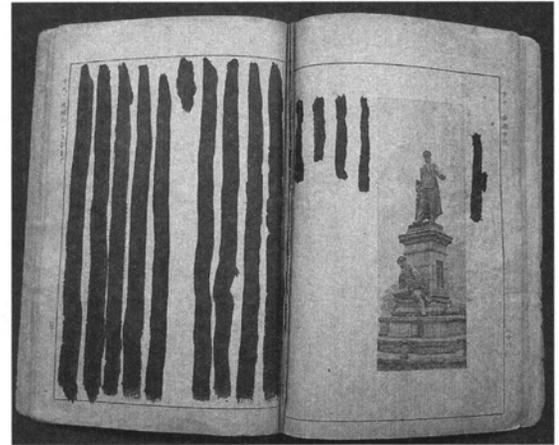
失業者は町に溢れた。市は戦災復興計画を立ちあげ、混乱收拾に全力を注いだ。

**民主化の波** 日本を占領したGHQ（連合国軍総司令部）の主な任務は、日本の軍国主義と封建的体質を全て改めることであった。軍の指導者を裁判にかけ、戦争協力者を公職から追放したり、地方自治の仕組みを一新したりして、民主化を進めた。

また農地改革（農地解放）を断行し、小作制度を廃止した。これは、不在地主の小作全部と在村地主の小作地のうち1町歩（約1ha）を超える分を国が買い上げ、小作農民に安く売り渡すという大改革であった。これにより、自作農家が大幅に増えた。

**新しい教育制度** GHQの指令は教育にも及んだ。従来の教科書はそのまま使えず、戦争

に関する部分は墨で塗りつぶしたり、ページ全体を糊付けさせられた。奉安殿も御真影も学校から姿を消した。



墨で塗りつぶされた教科書（牛川小学校蔵）

昭和22年（1947）教育基本法・学校教育法が制定された。義務教育の年限が延びて新たに中学校3か年が義務化され、男女共学となった。小学校教育6か年と合わせて9か年を義務教育とする六・三制が発足した。

**新しい牛川小学校** 昭和22年4月、牛川国民学校は豊橋市立牛川小学校と改められ、1学年2学級ずつ（全校12学級）の新たな教育がスタートした。

同24年（1949）には牛川小学校PTAが発足した。PTAは学校と一緒に、手弁当で学校の環境整備を進めたり、運動会・学芸会などの復活に取り組んだりして教育の復興に力を尽くした。米はまだ配給制であったので、修学旅行は各自が米持参で出かけた。

昭和26年（1951）には、待望の学校給食が始まった。牛川小学校にも給食調理室が設置された。脱脂粉乳入りのミルク、コッペパン、地元野菜が中心の献立であったが、食糧不足の中、栄養を考えた学校給食は大きな役割を果たした。

**少年野球の活躍** 牛川小学校は、敗戦後の子どもたちに希望をもたせるために、昭和21年（1946）、いち早く野球の指導を取り入れ、

学校あげての活動とした。

選手は練習し、選手以外はフナ・モロコ・ドジョウ・イナゴ捕りをして選手に食べさせるなど、連帯意識も日増しに強まった。創立1年目に市内優勝を果たし、熱心に応援して町民の意気もあがった。やがて「牛川の野球は強い」と、市内の目標になった。選手の中には、ノンプロに進んだ者もいた。

**青陵中学校の創立** 昭和22年(1947)六・三制の発足により、新制中学校が豊橋市内に10校設立されることになった。

牛川校区には北部第二中学校が設立された。しかし校舎はなく、牛川小学校に間借りしての授業であった。翌23年、豊橋二中(旧制中学)が東高校となって他へ移転したため、北部第二中は東部中と合併し、新たに青陵中学校としてスタートした。

**牛川郵便局の開設** 終戦直後の昭和21年(1946)牛川郵便局が開設された。牛川は市街地に近いことや人口が少ない地域であったことから、それまで郵便局がなかった。町民の熱望により、中郷の空き家を補修して郵便局開設の運びとなった。通信・金融機関ができたことにより、町民の利便はもとより、復興を加速させる大きな力となった。

同27年(1952)には、南郷に局舎を新築して移転した。

同42年(1967)には、市施行の区画整理により裏通りになってしまうことから、現在地(牛川通三丁目)に新局舎を建設して移転した。



牛川郵便局(昭和30年頃)

## 6 牛川近代化のあゆみ

### (1) 移り変わる農業

**古くからの農業地帯** 牛川では、古くから農業が行われてきた。暮川や沖野にかけての豊川の沖積低地では稲作が中心であった。田を耕すため明治の中頃から牛馬が大活躍した。牛馬は荷物を運搬する手段でもあり、荷車を引いた牛や馬が、糞をまき散らしながらのんびりと砂利道を行き来した。

河岸段丘にあたる牛川台地では、棉・豆・きび・粟・さつまいもなどの畑作と、自給用の野菜づくりが中心であった。

明治になると、国策として養蚕が盛んになった。さつまいも畑が桑畑に代わり、貴重な現金収入源となった。桑苗の接ぎ木も盛んになって養蚕や製糸は全国に誇る一大産地となった。しかし昭和に入ると、安い人造絹糸が開発され、養蚕はしだいに縮小されていった。これに代わるものとして果樹栽培が盛んになった。明治末からすでに梨の栽培が行われていたが、昭和になると、柿の栽培が奨励されて盛んになった。



牛を使った農作業(婦人部の農業研修会)

**近代化する農業** 戦後しばらくは、農作業もほとんどが人力に頼っていた。農作業が集中する時期になると、小中学校は農繁休暇になった。牟呂の海苔養殖の粗朶に暮川の竹が使われたことが縁になって、暮川と牟呂との手伝いの交流が行われた。

昭和30年代に入ると、トラクターなどの農機具の開発が盛んになり、農業の機械化が一気に進んだ。40年代に入ると、柿に代わって巨峰ぶどうの栽培が盛んになった。しかし<sup>せん</sup>剪定・消毒・摘果・袋掛けなどに手がかかることや過剰生産による値崩れにより、縮小されていった。

これに代わり、ビニルハウスでのいちご・トマト・メロンの栽培、花・野菜・植木作りなど都市近郊農業に切り替えられてきた。

戦後大規模化してきた養鶏・養豚・養牛などの畜産は、都市化とともにいつしか姿を消してしまった。

**企業化する農業経営** 近年のグローバル化の波に押されて、牛川の農業もさらに変革している。農産物のブランド化、生産過程の自動化や省力化、生産物の出荷調整や直販化が進められている。同時に、多様化する農業用機械の購入、情報化やネット化に対応するコンピュータの導入、自動化や省力化に対応するハウス施設の改善、出荷調整を可能にする大型冷蔵倉庫の設置、作物にとって最適地の確保や借り入れなど、膨大な資金が必要となっている。



時代の先端を行くいちごのハウス栽培

牛川でも、結実時季のずれを利用したいちごのハウス栽培や開花時季のずれを追っていく花のハウス栽培、盆前のお荷をめぐす種無し巨峰ぶどうのハウス栽培などが効果をあげ、注目されている。

**農家を支える農業協同組合** 明治政府は、農業の生産指導機関である農会を市町村単位に設けた。また、農家経済を互いに助け合うために産業組合の設立を町村に奨励した。

大正2年(1913)、下川村に購買組合(牛川農業協同組合の前身)が設立された。中郷に仮事務所を置き、第十五師団の馬糞の払い下げを主な仕事としていた。その後洗島に事務所を新築し、信用部門を併設して牛川信用購買組合と改めた。昭和9年(1934)には、元下川村役場の建物の払い下げを受け移築した。さらに作業場や農業倉庫を建設し拡充した。第二次世界大戦が始まると、農会と統合して豊橋農業会となった。食糧増産や物資の配給などの業務を継承した。



牛川農協と火の見やぐら(昭和28年頃)

終戦後の昭和22年(1947)農業協同組合法ができて、農業会は解散となり、豊橋東部農業協同組合(下条・牛川・東田・多米・飯村・岩田の地区)が設立された。その後、各支所が独立し、牛川農業協同組合が発足した。同59年(1984)、豊橋の農協は4つに統合されて、豊橋北部農業協同組合牛川支所となった。事務所を牛川通一丁目に移し、農業資材や農薬・肥料の販売、農産物の協同出荷、農業資金の貸し付けなどの金融機関として、牛川地区の農業の発展に大きな力となった。

平成9年(1997)には、市内5つの農協が合併し豊橋農業協同組合(JA豊橋)となり、その牛川支店となった。

## (2) 産業の変遷

**石とり山の石灰** 文政4年(1821)吉田藩主松平伊豆守が小鷹野で鷹狩りをした時、放った鷹の止まった岩が石灰岩だったのに目をつけ、後藤家に石灰を焼くよう命じたといわれる。後藤家は嵩山<sup>かみもと</sup>で石灰業を営んでいたが、水運に便利な洗島に引っ越して開業し、江戸や大坂に出荷した。明治以降も後藤家が代々受け継いだ。砕石した石灰石は手押し車や牛車で後藤家まで運び、豊川の通称「後藤河岸」から出荷された。ダイナマイトの発破音は連日山にこだまして、土地の人々になじみの音となっていた。

太平洋戦争が激しくなるにつれ、軍需産業に直結していないという理由で一時休業はしたものの、戦後復活した。昭和31年(1956)、田原の小野田セメントの求めに応じて、山主の後藤庄五郎は牛川鉱山会社と契約を結んで、月産4千tの石灰を毎日ダンプ5台で田原工場に運んだ。



ありし日の石とり山

しかし、田原白谷で石灰岩層が発見され、昭和45年(1970)、採掘権は梅藤石材に移動してしまった。同社はしばらく採石を行っていたが、昭和53年、土地開発会社に譲渡、宅地造成工事が始まって、今日の景観へと変貌して行くのである。

採石により白く削られた山肌の遠望は長い間親しまれた牛川風景であったが、今は幻の風景となった。

**まぼろしの赤彦焼** 赤彦焼は文化3年(1806)吉田藩主松平伊豆守が瀬戸から陶工を呼び寄せ、牛川で焼いたのが始まりとされる。窯元のすまいは現在の牛川小学校のあたり。藤次郎屋敷といわれた古屋敷で、裏に川が流れていたため、川端又さと呼ばれていた。又さは元締<sup>もとじめ</sup>からの命令で、今の農協付近に窯を造り、陶土は薬師山から運んだ。吉田藩御用の茶碗や皿などを、淡青磁色で焼いた。明治の末まではよく見かけたものの、今は後藤家に一部残るだけの幻の焼き物となっている。

**巧みな竹細工** 竹林が多かった牛川では、郷土の特産品として、竹を活用した「籠」の製造がよく行われていた。桑摘み籠や竹箕・石箕などの実用品が中心であった。特に竹工名人といわれたのが坂下の籠やとか籠熊さんの愛称で親しまれた野口熊次郎である。野口は工芸品として芸術性の高い竹盆や華籠を編み、宮中献上品の容器籠の注文も受けていた。

戦後は化学製品の進出に押され、竹職人はつぎつぎと姿を消した。今では、数軒が残っているに過ぎない。

**酸素工場** 戦争真っ只中の昭和19年(1944)今の牛川通二丁目に日本理化学工業株式会社豊橋工場が開設された。この工場は空気を圧縮して臨界温度にし、液体空気にして酸素を作り出す仕事をしていた。住民は酸素工場と呼ばれ、酸素ポンペを積んだトラックを目にした。ポンペの転がる金属音をよく耳にした。

昭和46年(1971)、酸素工場は東海アセチレン株式会社に譲渡され、社名も内容も変わった。さらに平成11年(1999)東三総合ガスセンターとなり、充填工場も設備も一新されて今日に至っている。創業内容は時代のニーズに応え、医療系・食品系・工業系の酸素・窒素・炭酸ガス・アルゴンなどを製造している。唯一むかしのなごりを留めるものは、敷地内の大木と小さな稲荷の祠である。

### (3) 三菱レイヨンの誘致

**大企業誘致の施策** 豊橋市は昭和30年(1955)二川町と石巻・老津・高豊・前芝の4か村、さらに杉山・賀茂地区を合併した。豊橋市の面積は名古屋市を抜いて県下最大となり、人口も20万人を超えた。合併の日、牛川小学校の児童たちも、提灯行列を繰り出して祝った。

財政難からの脱却を目指す豊橋市は、昭和25年、大日本紡績の誘致に成功していたが、さらに工場設置奨励条例を制定して積極的に大企業の誘致に力を入れた。これにより、東都製鋼・伊藤ハム・三菱レイヨン・京都ダイカスト・日東電工・神鋼電機などが進出した。**牛川住民の決断** 戦後の食糧不足を解消するために豊川用水が具体化された。その完成間近の昭和33年(1958)、牛川地区は豊川用水を受け入れて耕地整理を進めるか、それとも、区画整理を施行して宅地化を進めるかの決断に迫られた。検討を重ねた結果、住民は後者を選び、工場誘致を前提とする市施行の区画整理事業が展開されることとなった。



区画整理直後の牛川東部(昭和53年)  
石とり山付近から撮影

事業計画は5か年、総面積868,210<sup>m</sup><sup>2</sup>(公園15か所と工場用地・新設学校用地を含む)、住宅8,150戸(整理前438戸)人口32,600人(同2,660人)、総工費7億円超という大事業であった。区画整理は物価上昇のために計画変更と工期延長を2度行い、総工費16億円、16年の歳月をかけて同53年(1978)に完了した。

こうして、今のように平らで整然とした街

路網や上下水道網、緑地帯や公園といった街づくりの基ができた。

**三菱レイヨンの稼働** 地元でつくる区画整理準備委員会は、工場誘致の条件として、①公害がない、②従業員は地元より採用する、③工場と社宅を分離する、④工場敷地内に公道を設けることなどを市に陳情した。

昭和35年、市は地元の要望を踏まえ、三菱レイヨンを誘致し契約した。翌年豊橋工場の建設に着手、37年には第1工場が完成し続いて第2工場と火力発電所が建設され、豊橋でも有数の大規模工場として活動を始めた。

**三菱レイヨンの製品** 三菱レイヨンは「世界に伸びる化学繊維・樹脂」をモットーとし、昭和37年(1962)本格的に稼働を開始した。敷地面積は456,000<sup>m</sup><sup>2</sup>(約138,000坪)、社員は約1,000人。そのうち三分の一が敷地内の社宅や寮に居住した。生産品目は、ポリエステル長繊維・ポリプロピレン長繊維・アクリルフィルム・エンジニアリングプラスチック・炭素繊維・多孔質中空糸膜などである。

具体的には洋服の繊維や産業用ロープ、自動車の内外装飾部品用樹脂、航空宇宙・建築土木・スポーツ・レジャーなどの炭素繊維(パイロフィル)、医療用の微多孔質中空糸膜、情報伝達の光ファイバーなど多岐にわたっている。

伝統ある豊橋まつりには、「クイーンの衣装」を毎年寄贈し、豊橋の発展にも大いに貢献している。



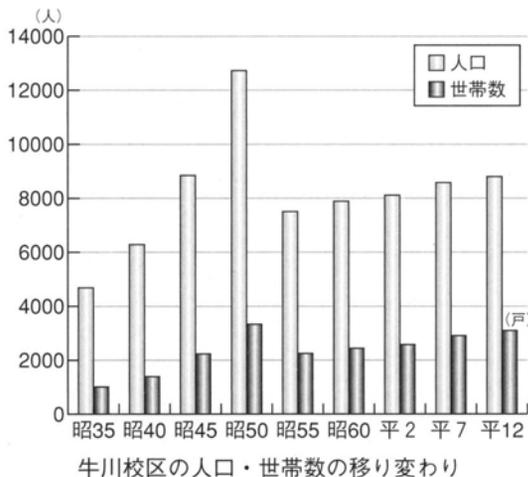
三菱レイヨン豊橋事業所

#### (4) 人口増と鷹丘校区の分離

**急速な都市型化** 牛川の町は、①昭和36年(1961)から始まった市施行牛川土地区画整理事業に伴う大規模な宅地造成、②追隨して行われた南台埋立事業(S39~45)・緑ヶ丘土地区画整理事業(S42~47)・浪ノ上土地区画整理事業(S52~62)による宅地開発、③市営住宅や県営牛川団地の建設、④三菱レイオンをはじめ大企業の進出、⑤豊橋短期大学(現豊橋創造大学)の建設などにより、昭和の後半、急速に都市型化していった。

豊かな自然の恵みを受けて、農業を中心に古くから発展してきた牛川、豊川の渡河地として交通の要路であった牛川、石灰製造、瓦製造、竹細工、農機具作りなどの地場産業を栄えさせてきた牛川は、大企業をもった静かな住宅・文教地区として急速に様変わりしていった。

**人口の急増** このような急速な社会変化に並行して、昭和40年代からの住宅建設ラッシュや大企業進出に伴った人口流入により、牛川の人口は急増してきた。昭和50年(1975)の牛川の人口は12,729人に膨れ上がり、同35年(1960)の2.8倍にもなった。人口増の特に著しかったのは牛川東部山麓にひろがる丘陵地帯(小鷹野、忠興、緑ヶ丘)であった。



**新設校設置と校区の分離** 牛川小学校の児童数も急増の傾向が見られ始めた。昭和49年には、1,000人を超えた。運動場に建てられたプレハブ校舎で授業を受けなければならない状態になった。

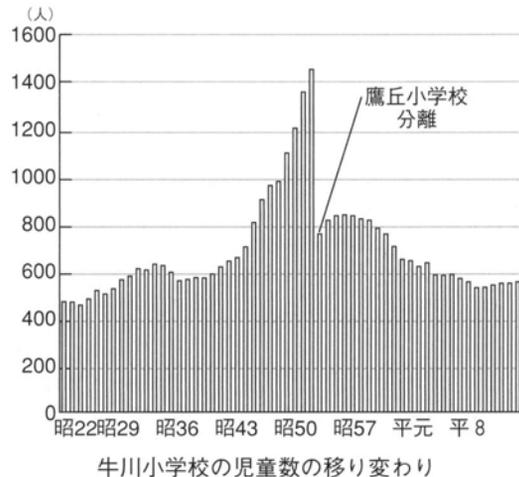


運動場いっぱいの児童とプレハブ教室(昭和52年)

昭和47年(1972)牛川第二小学校期成委員会(50年に建設期成促進委員会、52年に新設小学校協力会と変更)が結成され、新設校の建設を積極的に働きかけた。

市はこれを受けて、小鷹野に新設小学校をつくることにし、同52年建設に着手した。牛川地区新設小学校協力会と関係学校長とが校名選定協議会を開催し、公募をもとに「鷹丘小学校」案を市に答申した。

昭和53年(1978)4月1日、市内第44番目となる鷹丘小学校が誕生した。同時に、小鷹野・忠興・緑ヶ丘の3地区は牛川校区から分離し、鷹丘校区となった。





**商業（店舗）の現況** 牛川校区内の店舗は旧道沿いから青陵街道や豊橋環状線沿いへと移ってきた。車社会の発達に対応するためである。

広い駐車場を備えることが店舗の条件にもなっており、駐車場を共有する集合型の店舗も多くなってきた。

依然として飲食店や食料店の割合が大きい。チェーン店やコンビニなど新しいタイプの店舗の進出も目立つ。かつての“よろず屋”はスーパーに変わり、小間物屋や下駄屋は姿を消していった。

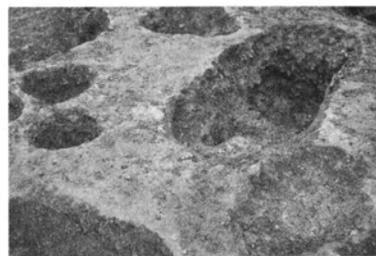


**工業（工場）の現況** 校区内の工業は三菱レイヨン豊橋事業所に代表されるが、中小の事業所（工場）も60余を数える。その内、建設関連の事業所がおおむね半数を占め、製造業に取って変わろうとしている。

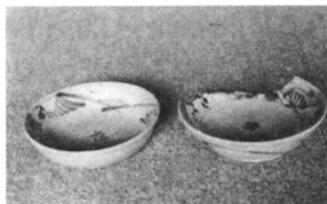
かつては牛川の特産品であった石灰製造（石ばい屋）・瓦製造（瓦屋）・農機具作り（かじ屋）・竹細工（竹屋）が時代の変化とともに姿を消しつつあるのは惜まれる。

年表——牛川校区のあゆみ——

旧石器	10万年前	○牛川人が生存
縄文	1万年前～	・眼鏡下池遺跡、洗島遺跡、西側北遺跡
弥生	BC300～	・浪ノ上第一遺跡、西郷遺跡
	AD200～	・牛川町内古墳31基（S30年調査）
古墳		○名記江村の発祥
奈良	702 大宝2	・持統上皇、三河に行幸
平安		・正圓寺創立 薬師如来坐像開眼
		・浪ノ上熊野社・偏戸社創立
鎌倉		○牛川村の発足
		○鎌倉街道の往来さかん
室町	1375～ 永和頃	・桃林寺再興
	1591 天正19	・正太寺創立
江戸	1651 慶安4	・圓忠寺創立
	1680 延宝8	・正圓寺に寺子屋
	1682 天和2	・若宮村の開発
	1690 元禄3	・野川神明社創立
	1708 宝永5	・田中新田完成 田中神明社創立
	1763 宝暦13	・正太寺に寺子屋
	1806 文化3	・赤彦焼（牛川焼）始まる
	1821 文政4	・後藤庄五郎、牛川に石灰役所
	1850 嘉永3	・豊寿稲荷創立
	1873 明治6	・第9中学区第42番小学牛川学校創立
明治	1876 明治9	○八名郡牛川村（8村合併による）
	1888 明治21	・牟呂用水開通、牛川を通る
	1892 明治25	○八名郡牛川村に暮川村を編入
大正	1906 明治39	○八名郡下川村（牛川村・下条村が合併）
	1913 大正2	・購買組合（牛川農業協同組合の前身）創立
	1914 大正3	・後藤坂の改修
昭和	1926 大正15	・豊橋第二中学校創立（昭和2年、青陵中の地に移転）
	1930 昭和5	・下川村、新嘗祭献穀田に指定。忠魂碑建立
	1932 昭和7	○豊橋市牛川町（町村合併で豊橋市に編入）
	1934 昭和9	・牛川土地区画整理事業（～S35）※図①
	1945 昭和20	・三河地震と豊橋空襲により被害を受ける
	1947 昭和22	・牛川国民学校、豊橋市立牛川小学校と改名
	1947 昭和22	・北部第二中学校創立
	1948 昭和23	・青陵中学校創立（北部第二中と東部中との合併）
	1948 昭和23	・市営田中住宅完成 南町の母体となる
	1951 昭和26	・牛川保育園創立
	1959 昭和34	・桜ヶ丘高校男子部校舎竣工（翌年女子も移転）
	1961 昭和36	・市施行牛川土地区画整理事業（～S52）図②
	1962 昭和37	・三菱レイヨン操業開始
	1966 昭和41	・牛川文化協会創立
	1966 昭和41	・豪雨により朝倉川氾濫し7名犠牲
和	1970 昭和45	・牛川校区体育振興会設立
	1975 昭和50	・牛川育英幼稚園創立
	1976 昭和51	・青陵地区市民館開館
	1978 昭和53	○校区再編成（鷹丘小学校を分離）
	1980 昭和55	・浪ノ上東部土地区画整理事業（～S62）図③
	1981 昭和56	・牛川校区市民館開館
	1982 昭和57	・牛川地区体育館開館
	1983 昭和58	・豊橋短期大学（現豊橋創造大学）開校
	1993 平成5	・桜丘中学校の再開
	平成	1995 平成7
1997 平成9		・青陵中学校より東陵中学校を分離
2006 平成18		・豊橋市制100周年記念行事 牛川校区史刊行



実証された煮炊きの跡 P.17



幻の赤彦焼と竹細工 P.38



使われなかった看板 P.30



懐かしい豊橋二中の玄関 P.32



牛川校区の土地区画整理事業  
（番号は年表の番号に対応）

## 第3章 教育と文化



1 キロ公園にある青陵地区市民館

三方を川に囲まれた台地に開けた牛川には、古代から人々が住みつき、豊かに暮らしていたと思われる。鎌倉街道・別所街道や豊川の舟運など交通の要衝であり、文化の伝播も早かったであろう。寺社も多く建立され、教養高い僧侶などを中心に学問や文化が浸透した下地があり、現在も牛川文化協会等の活動が盛んである。また、幼保・小・中・高・大学といった学校の他、公共施設も充実し、教育や文化を担う人たちも多く居住し、ますますの向上が期待される。

### 1 充実した教育機関

#### (1) 幼児教育

**牛川保育園** 牛川保育園は昭和26年（1951）牛川町中郷13・14番地（現在の校区市民館）に開園された。定員60人、木造平屋建で、経営主体は豊橋市社会福祉協議会、初代施設長は鈴木淳平であった。

以後、昭和46年社会福祉法人育英会牛川保育園となり、昭和55年4月には障害児保育指定園となった。昭和53年に園舎改築移転で、中郷2番地の熊野社の土地を借り、鉄筋コンクリート2階建を造った。



練習の成果を披露する園児たち

定員120人であるが、平成18年4月現在131人の幼児を預かり、障害児保育はもとより、長時間保育や地域交流として、地域の高齢者や小学校と世代間交流を実施している。

**牛川育英幼稚園** 牛川育英幼稚園は昭和50年（1975）牛川町浪ノ上に開園された。学校法人正圓寺学園の設立で初代園長は金仙宗樹であった。

昭和52年には園地を拡大し、鉄筋コンクリート2階建の園舎を新築し、57年には第2遊戯室が完成した。

強く・明るく・仲良く・伸びるを目標とし、自然の恵みの中で豊かな情操を培っている。基本的な生活習慣の育成とともに、一人ひとりの適性を生かし、自主的に活動できる子どもの育成を目指している。平成18年4月現在、158人の園児が通園している。



「親子ふれあい」のひとつ

#### (2) 義務教育

**牛川小学校** 牛川小学校は、牛川に住む人々の故郷ともいえる学校であり、数世代にわたって縁のある家も多い。創立以来130年を超える歴史ゆえ数々のエピソードを生み出してきたが、特筆すべきものに設立当初のできごとがある。

明治6年(1873)小学牛川学校として創立されたものの、校舎そのものはなかった。学校を建てるため、八名郡が10か年割済で学校寄付金を募集したところ、牛川村の松坂五百枝が一時金600円を基金として寄付した。そのため、明治7年、他に例のない人名による校名「松坂学校」と改称されたことである。県訓導猪俣充の月給が6円50銭、米1石が10円80銭の時代であった。

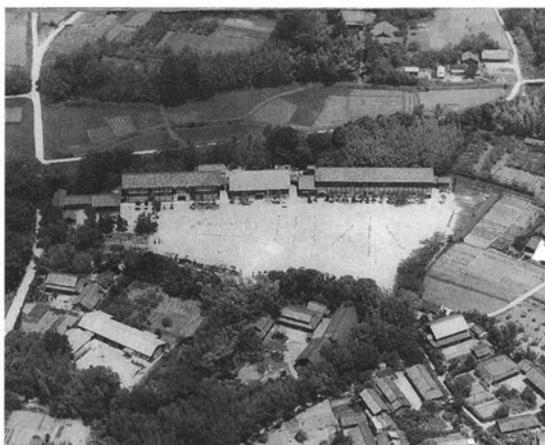
牛川小学校の校名は、下記のような変遷をたどってきた。

【牛川小学校の校名の変遷】

- ・第9中学区内第42番小学牛川学校(明治6年)
- ・第42番小学松坂学校(明治7年)
- ・八名郡第35番小学松坂学校(明治12年)
- ・八名郡牛川村第35番小学牛川学校(明治14年)
- ・八名郡第32番学区公立小学牛川学校(明治16年)
- ・八名郡尋常小学牛川学校(明治20年)
- ・牛川尋常小学校(明治25年)
- ・牛川尋常高等小学校(明治35年)
- ・下川第二尋常高等小学校(明治40年)
- ・牛川尋常高等小学校(大正13年)
- ・豊橋市立牛川尋常高等小学校(昭和7年)
- ・豊橋市立牛川国民学校(昭和16年)
- ・豊橋市立牛川小学校(昭和22年)

現在、教育改革の名の下に、明治以来続いた三学期制を二学期制に移行しようとしている。また、英会話の授業も導入されることになっている。

区画整理にともなう運動場やプールの位置の変更もあり、ハード面やソフト面で大きく変わろうとしているところである。



懐かしい牛川小学校(昭和30年頃)

**青陵中学校** 青陵中学校の歴史はマンモス化解消の歴史と言っても過言ではない。昭和23年、通学区域も広がり、現在地で新たにスタートした時点から、すでに生徒数は1,200人を超えていた。

同25年豊岡中学校を分離独立させ、マンモス化の解消と、多米・岩田からの遠距離通学の解消をしたものの、常時生徒数は1,000人を超え、ついに昭和37年には2,019人という県下最大規模の中学校となった。特別教室の多くが普通教室に転用され、武道場をも4つに仕切って使うという「四つ切り教室」までできる有様であった。

こうした劣悪な環境の中にありながら数々の栄光を打ち立ててきた。学力は県下トップクラス、スポーツ面でも駅伝・野球・陸上・卓球を始めとし県大会や全国大会で大活躍を果たした。文化面でも、美術・新聞・技術・英語などで全国的に活躍した。生徒会活動も活発で、夏みかん並木の育成、国内外との交流を通じて、心豊かな人材の育成を目指して邁進した。

平成9年、東陵中学校を分離独立させ、長年の懸案であった過大規模校は解消された。



桜花爛漫の青陵中学校

**桜丘中学校** 桜丘中学校は、大正15年創立の旧制桜ヶ丘高等女学校が母体である。昭和22年(1947)私立桜ヶ丘中学校として出発したが、7年後の同29年休校となった。平成5年(1993)、中高一貫教育の名の下に、新生桜丘中学校が再開された。平成12年度に3クラス

が認可され、以来平成17年度の第11期生までに卒業生は900人に達し、桜丘高校に進学する一貫教育の生徒は毎年90%と安定している。部活動にも力を入れ、文武両道の私立中学として躍進を続けている。



合唱大会で歌声を披露する桜丘中学校生

### (3) 高等教育

**桜丘高等学校** 学園のあゆみは明治42年1月にまで遡る。熱心なキリスト教信者の満田樹吉・オリガ夫妻が、キリスト教の精神を基調とする社会奉仕事業として、豊橋西八町に開いた裁縫塾が始まりである。大正15年(1926)には豊橋実践女学校として開校したが、昭和20年の豊橋空襲で戦災にあって校舎は全焼した。また、学徒動員で戦没者37人を失った。その後、旧制桜ヶ丘高等女学校に改組され、学制改革により、昭和23年桜ヶ丘高等学校となった。

昭和34年4月には牛川町田中に男子部校舎を竣工し、男子部全学年が移転した。3年後



桜丘高校の新校舎

には東郷町校舎(現市立高校)より女子部普通科が牛川校舎に移転した。昭和40年には全生徒が牛川校舎で学ぶことになり、東郷町校舎は閉鎖となった。

昭和46年には桜丘高等学校と校名を変更し、図書館、武道場も建設した。昭和61年には、普通科に英数コースを新設、平成元年には男女共学となった。

平成17年、学園創立80周年記念式典を挙げる。記念事業として一号館(鉄筋コンクリート5階建)を改築した。

**豊橋創造大学・同短期大学部** 昭和58年(1983)、豊橋市及び牛川校区の協力を得て、学校法人藤の花学園は、豊橋短期大学(幼児教育科・秘書科)を開設した。場所は豊川べりの牛川町松下、41,408㎡の校地であった。

平成2年(1990)に経営情報科設置、同8年には4年制大学となり豊橋創造大学と改称した。同時に豊橋短期大学は豊橋創造大学短期大学部となった。現在短期大学部は、幼児教育・保育科、キャリアプランニング科、専攻科からなり、大学に経営情報学科、メディア・ネットワーク学科、大学院に経営情報学研究科を置いている。



次代を担う若者を育てる創造大学

さらに、平成18年(2006)には情報ビジネス学部キャリアデザイン学科とリハビリテーション学部理学療法学科が新設された。

「創造性のある人格の形成と人類の福祉に貢献する社会人の育成」の理念のもとに大勢の学生が巣立っている。

## 2 生涯学習の町牛川

### (1) 地域に根づく文化活動

牛川文化協会 牛川文化協会は昭和41年(1966)、石川彦作・石川一美・西郷正男・佐野康一・伊藤寿一郎・古谷武らによって設立された。主旨は地域に根ざした文化活動であった。同54年に「郷土のしおり牛川」、56年に「写真集ふるさと牛川」を刊行したのを始め、歴史を中心とする文化面で大きな成果をあげた。こうした盛んな地域文化活動が評価され、平成3年豊橋文化振興賞を受賞した。



牛川文協の数々の出版物

昭和60年には20周年記念誌を、平成7年には30周年記念誌を発刊した。

平成17年、創立40周年を迎えた牛川文協は、記念誌の発刊と共に、「創立40周年記念祭」を市民文化会館で開催した。展示では芸芸部の短歌部・水墨画部・書道部・川柳部・写真部・押絵部・つまみ絵の作品が並び、文化部の華道部では池坊・南宗流・松月堂古流・嵯峨御流・花芸安達流・創作粘土・アートフラワーが飾られた。芸能部は大ホールで、軽音楽部・民舞・民謡・詩吟・おばあちゃんの英会話・ハーモニカバンド・カラオケなどの発表を盛大に行い40周年を祝った。



感謝の式辞を述べる林みな子会長

青陵地区市民館 昭和51年(1976)地域コミュニティの場として青陵地区市民館が開館した。年3回、青陵中学校区の総代会長を中心に運営委員会が開かれ、事業計画が策定されている。現在約50グループが定期的に活動し、年間5万人を超える利用者を数えている。

発刊以来300号となる「市民館だより」や「お母さんと遊ぼう」の事業も人気を集めている。年に1回開催される地区市民館まつりでは、利用者の自主グループが中心となり、作品展や芸能発表会を開き、生涯学習のよき発表の場となっている。



緑に囲まれた青陵地区市民館

牛川校区市民館 校区市民館は、昭和56年(1981)地域コミュニティの場として小学校単位の作られた施設である。

学校の土日休業に伴い、子ども向けの楽しい講座を企画し、休業受け皿の役割も果たしてきた。年間の利用者は約1万4千人を数え、校区住民の憩いの場となっている。年1回牛川文化協会の協力を得て行われる「市民館まつり」は、小学生の作品も展示され、なごやかなムードを醸し出している。



子どもたちの作品も並ぶ市民館まつり

## (2) 体力と健康づくり

**牛川校区体育振興会** 昭和45年（1970）総代・各種団体役員が準備委員となり、牛川校区体育振興会が設立された。豊橋市より「市民体力づくり推進指定校区」として委嘱され、同年12月には第一回牛川校区体育大会が小学校を会場に盛大に開催された。中町・北町・南町・洗島町・県営牛川団地・若宮町・忠興町・三菱町・小鷹野町の9町内1,800人が参加して市長杯を競った。

同53年には鷹丘校区と分かれたため6町で開催した。以降、平成18年度で37回を迎えた伝統ある体育大会となっている。

その他スポーツの愛好家の校区民によるインディアカ・バドミントン・ソフトバレー・ママさんバレー・空手なども年々盛んになり、休日や夜の校区各体育館は歓声と声援に満ちている。

**少年スポーツの振興** 昭和50年代前半、高度経済成長はかげりを見せ「省エネ」ムードとなった。一方子どもたちはテレビゲームに夢中になり、社会的にも心身の健全な育成が問われるようになった。

昭和52年夏目正夫らによる牛川剣道少年団が結成された。牛川校区子ども会で行われていた町別ソフトボール大会が起爆剤となり、同54年、石川博義らにより少年野球チーム「牛川パイレーツ」が誕生した。対外試合でのすばらしい活躍は、草分け時代からの歴代の熱心な指導者のもと今日まで続いている。

**牛川地区体育館** 昭和57年（1982）北部地区体育館として牛川町田ノ上の開館した。平成6年牛川地区体育館と名を改めた。バスケットボール（2面）、バレーボール（2面）、バドミントン（6面）、卓球（8台）をはじめ、

ペタンク、グラウンドゴルフなどの貸出用品も有している。年平均利用者数は3万1千人を超え、貸出業務だけでなく、体育協会主催による年3回の地区体フェスティバルや月2回のスポーツ教室も開いている。ドッチビーやミニテニス、インディアカ等のニュースポーツの普及にも力を注ぎ、スポーツ振興の要となっている。

**1キロ公園** 青陵街道の南、桜丘学園の北に東西に伸びる遊歩公園を通称1キロ公園と呼ぶ。正式には牛川遊歩公園である。サクラ、クスノキ、ケヤキなどの並木が周囲約3kmに立ち並び、そのひっそりとした落ち着いた雰囲気と共に、四季折々に見せる自然の変化が市民を楽しませ、快適な憩いの場となっている。朝夕には散歩やジョギングなどで多くの住民が利用し、足つぼマッサージのできる「健康遊歩道」も完成した。公園内には防災用水槽が埋められていて、大地震のときのための水の確保もできている。



校区民の憩いの場となっている1キロ公園

**健康なまちづくり事業** 平成17年、全市に先立ち牛川校区が「糖尿病抑制運動」のモデル地区に指定された。活動は「食」「運動」「学校」の3領域でそれぞれプロジェクトチームを形成、年間計画を立てて具体的な活動を定期的・継続的に実践している。地域住民に活動の趣旨を浸透させ、健康なまちづくりの先進地区としての役割を果たしている。

### 3 明るく住みよい町牛川

#### (1) 犯罪や災害のない町に

**防犯パトロール** 近年急増する犯罪や事故、災害などから自分たちの町を守るために、校区6町内が自主的に連携・協力して防犯活動を行っている。平成17年度、校区巡視のために青色回転灯車を購入し、パトロール隊を充実させて、昼夜、犯罪防止に努めている。

また、登下校時のボランティアパトロールや、見回り隊も重視している。毎月「牛川校区防犯だより」を発行し、犯罪発生情報を知らせ、啓発と予防に努めている。

#### 青少年健全育成会と「こども110ばん」

「伸びよう伸ばそう青少年」をスローガンに、昭和41年（1966）青少年育成国民会議が発足し、小・中学校単位に青少年健全育成会が結成された。青少年育成員とアドバイザーをリーダーとして、家庭・学校・地域が一体となって地道な活動が進められている。

平成5年（1993）、他校区に先がけて「こども110ばん」の家がスタートした。道路や公園、空地などで子どもたちの身近にとっさの事が起きた時に駆け込める家として、商店

や家庭に呼びかけて始まった。児童生徒の保護と安全、犯罪防止に効果を挙げている。

**防災訓練** 平成14年から毎年6月の第一日曜日を「牛川防災の日」と定め、大地震その他の自然災害を想定して、校区の人たちが参加して防災訓練を行っている。目的は、災害に備える意識を高め、正しい知識を習得することにある。近隣住民が相互に連携と協力を強め、地域や家庭が災害に備えることの大切さを学ぶためである。

全町内から1,000人目標で参加者を募り、消防署・消防団・医療機関とタイアップして、講話と実地の訓練をしている。

#### (2) 健康で明るい町に

**区画整理事業** 平成7年認可の牛川西部土地区画整理事業（約43ha）が本格的に起動して、中町・北町・洗島町で大規模な地域開発が実施されている。土地造成、道路建設、住居移築など、日々地域の様子は大きく変化している。

牛川校区が新しい時代に向けて、明るく住みよい町になるために、地域開発事業の積極的推進が期待されている。



道路はこのような変わる予定（牛川西部土地区画整理事業）

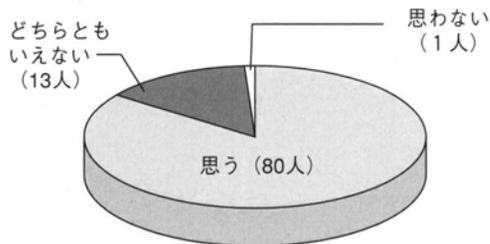
### (3) 子どもたちにとっての牛川

牛川西部地区の区画整理事業も着々と進捗しつつあり、完成の暁には整然とした都市型の住宅地に生まれ変わる。

次代の“牛川”を担う子どもたちはこの校区の現状をどのように捉え、どのような夢を抱いているのだろうか。牛川小学校6年生に次のような質問をしてみた。

(平成17年11月、6年生全員94名)

#### ①牛川校区は良い校区だと思いますか？



#### ◆「良い校区と思う理由は？」( )は人数(以下同じ)

- ・自然が多く、緑が豊かなところ (21)
- ・行事が多く活動的なところ (12)
- ・優しい人、良い人が多い (12)
- ・お祭り等が楽しいから (8)
- ・校区民が協力的で仲良し (7)
- ・年長者がよく教えてくれる (6)
- ・遺跡や歴史が豊富にある (4)
- ・あいさつがよくできる (3)
- ・パトロールをしてくれる (3)
- ・子ども会が楽しい (3)

#### ◆「どちらともいえない理由は？」

- ・他校区を知らない
- ・へんな人が出る
- ・もめごとがある
- ・バクチクがいや
- ・あいさつができる人とできない人がいる
- ・校区全体としての協力が少ない (各1)

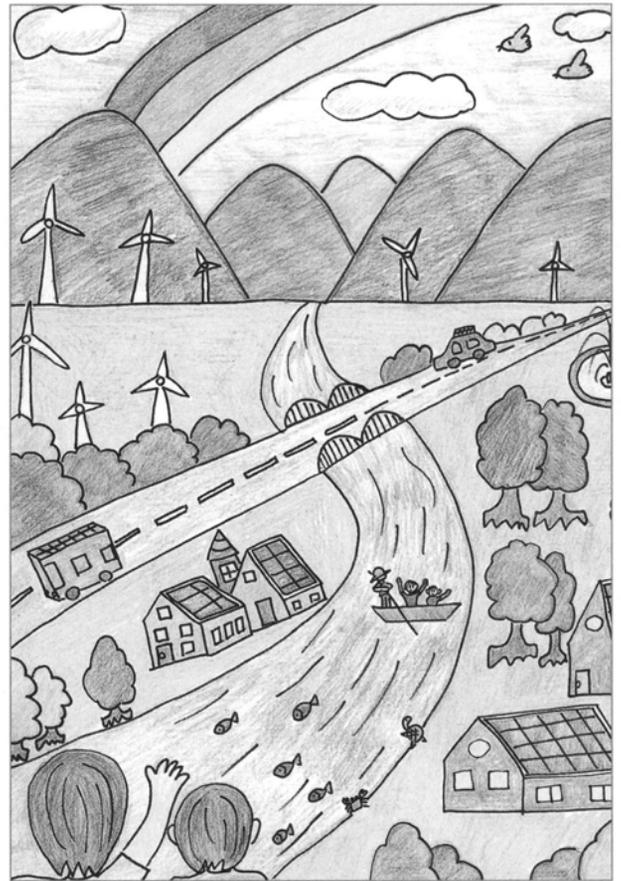
#### ②より良い牛川校区にするにはどうしたらいいでしょう？ あなたのアイデアを

- ・あいさつをし、みんな仲良く (16)
- ・楽しい行事やイベントを増やす (12)
- ・校区民間の交流や協力をする (8)
- ・自然を残し、樹木を増やす (6)
- ・ゴミ処理を適切にし、町を美しく (4)
- ・防犯・防災・事故防止に努める (4)
- ・校区の行事に積極的に参加する (4)
- ・今のままでよい (4)
- ・公園を増やす (2)
- ・みんなが健康に (2)
- ・らくがきをしない (2)
- ・デパートを設置 (2)
- ・祭り屋台を増やす (2)

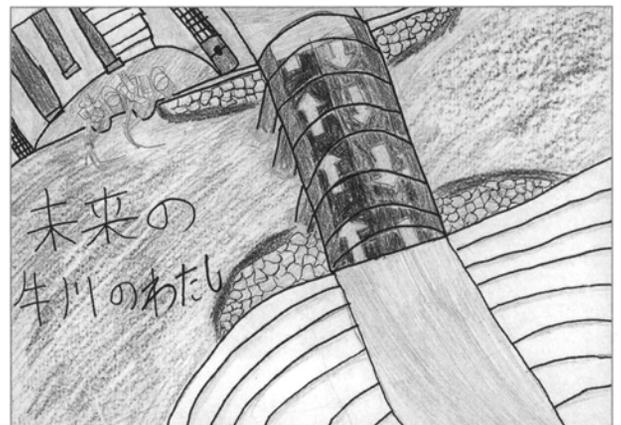
## 小学生の描く

#### ④理想の「牛川」を絵に描いてみよう

①～③の意識調査とは別に、「理想の牛川」を絵にしてもらった(自由参加)。自分のアイデアを具体的な絵に描くとなると、どうしても箱物が



「未来の環境」  
6年 福田 実菜



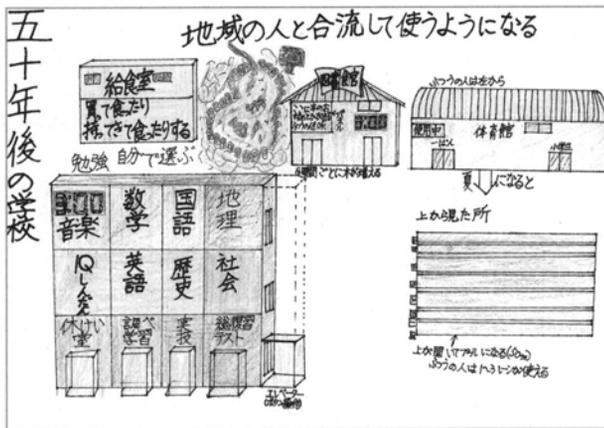
「未来の牛川のわたし」  
6年 平尾 晃希

## 理想の牛川

中心になってしまう。しかし、未来の環境の中に、「渡し舟」を残すと、「屋根付きの橋」を架ける子など、児童の理想もさまざま面白い。



「牛川クリーンプロジェクト」  
6年 佐野 友哉

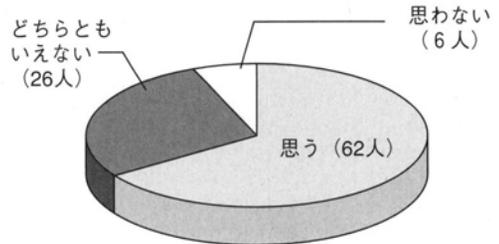


「50年後の学校」  
6年 小川 翔大



「牛川歴史館のある町」  
5年 内藤 佑佳

### ③豊橋市は住み良い都市だと思いますか？



#### ◆「住み良いと思う理由は？」

- ・自然が多く緑豊かなところ (22)
- ・適度に都会であるところ (10)
- ・仲良く人との交流ができる (6)
- ・交通の便が良い (5)
- ・田舎っぽく静かなところ (4)
- ・物価が安く生活しやすい (3)

#### ◆「住み良いと思わない理由は？」

- ・道がきたない ・騒音がある ・建物が少ない
- ・交通事故死が多い ・遊ぶ所が少ない
- ・へんな人がある (各1)

#### ◆「どちらともいえない理由は？」

- ・他の都市と比べられない (6)
- ・車が多くてうるさいところ (3)
- ・良い人もいるがへんな人もいる (2)
- ・自然は良いが道が危ない (1)
- ・まだ知らない所が多いので (1)
- ・あいさつができない人もいる (1)

子どもたちは、子どもたちなりに少ない情報の中で、かなりの確な判断を下したのではなかろうか。「自然が多く、緑豊かな豊橋」を判断基準のトップに挙げていることは注目に値しよう。

とかく発展する町とは、道路を作り、橋を架け、建造物を造ることだと考えがちだが、子どもたちは自然が豊かで人情も豊かな人たちが住む「牛川」を愛し、さらに良い校区にしていくなめには「物」より「人」、ハード面よりソフト面の充実を、と考えていることが分かった。私たち大人は、子どもたちのこれらの考え方に耳を傾ける必要があるのではないだろうか。

# 編 集 後 記

市制100周年記念事業の「牛川校区史」編集執筆を依頼されて、足かけ2年。ここに一つの冊子としてお届けできることを嬉しく思います。

私たちの校区牛川は、古代から現代に至るまで、市内でも有数の“永い歴史と伝統”に支えられた地域といえます。その豊富な史実と資料を、僅か52ページという市内統一条件の冊子に収めることは至難の技でありました。皆様方からお寄せいただいた貴重な資料を掲載できなかったことも多々あり、誠に申し訳なく存じます。

また校区民の方々に親しんでいただくために資料の取り上げ方や、文章表現の仕方も常に編集会議の課題でありました。校区の先人が残してくださった郷土史や写真集、さらに様々な方からのご助言があってまとめることができたものの、折角のご意思も十分反映することができなかったことをお詫び申し上げます。

ささやかな冊子ではありますが、深く永い牛川の歴史や生い立ちを知る糸口になれば幸いです。今後、さらに発展する牛川を担う次世代の方々が、いつか郷土史としてまとめていただくことを願ってやみません。

最後になりましたが、編集にあたりご理解とご支援をいただいた牛川校区総代会はじめ資料提供いただいた校区の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成18年12月 牛川校区史編集委員会

## 編集委員

白井 信夫 伊奈 彦定 高橋 規夫 近藤 清司 鈴木 佳和 金仙 宗哲 高木英太郎  
サポーター

家田 健吾 坪野 善朗

## 資料提供者 (個人50音順 敬称略)

朝倉 喜七 石井 正美 石川 泉 石川 博義 岩瀬 彰利 小川 雪二 岡本 泰  
後藤謙治郎 古山 保夫 佐野 敬明 皿井 信 鈴木 一郎 瀧崎 吉伸 竹下 卓志  
長井 和夫 野口 敏夫 松坂 光子 宮野 欣也 村田 敏 矢野ゆき子 (故)氏原 重孝  
校区各教育機関 寺院・神社 各種団体・企業等 牛川文化協会 豊橋市美術館

平成16～18年度校区総代会

## 参考文献

牛河、郷土のしおり牛川、写真集ふるさと牛川(石川一美編著、牛川文化協会) 炉辺閑話(石川一美著)  
牛川学校百年誌(創立百周年記念事業実行委員会) 牛川小学校創立125周年記念誌(創立125周年記念事業実行委員会) うしかわ(牛川小学校) 青陵50年のあゆみ(青陵中学校) 牛川南町30年誌(南町総代会)  
私の遊歩道(石川彦作著) 東三河出合いの野鳥(皿井信著) 曲尺手門No.3(中部中学校) 高橋清舫日記・画帖(高橋規夫編著) 村誌、村報第参号(八名郡下川村) 完工記念誌創成(浪ノ上東部土地画整理組合) 豊橋寺院誌(豊橋仏教会) 八名郡誌(鈴木宇良原著) 三河文献集成(近藤恒次編)  
豊橋の史跡と文化財、豊橋市埋蔵文化財調査報告書、現地説明会資料(豊橋市教育委員会) 豊橋市史、豊橋市政80年史、とよはしの歴史、土地区画整理事業の概要、豊橋市自然環境保全基礎調査報告書、豊橋市都市計画基本図、とよはし街路樹(豊橋市) 生きている霞堤(藤田佳久著、愛知大学総合郷土研究所)  
鎌倉古道幾山河(尾藤卓男著、東海地名学研究所) 愛知県歴史の道調査報告書X(愛知県教育委員会)  
三河地震60年目の真実(名古屋大学地震火山・防災研究センター)

## 校区のあゆみ 牛川

平成18年12月25日発行

編 集 牛川校区総代会  
牛川校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会

印 刷 株式会社 きょうせい

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています







2006年  
市制100周年  
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋